

朝鮮戦争と岩国基地—国連軍機の出撃と住民被害

藤目ゆき

(はじめに)

本稿は山口県にある岩国航空基地に視座をおき、英連邦占領軍 (British Commonwealth Occupation Force: BCOF) が占領下に行った軍事施設拡張と朝鮮戦争下に国連軍が実施した空爆作戦をとりあげ、それらが基地周辺住民に与えた影響を考察する。

朝鮮戦争時代、日本政府は米軍が主導する国連軍に全面的な協力を寄せ、日本国内の飛行場や港湾、国内各地の占領軍軍事施設は国連軍が朝鮮半島に出撃する拠点となった。掃海艇の派遣から軍需物資の調達・輸送、軍事労務の提供、さらには保養施設や遺体処理サービスの提供にいたるまで、日本の朝鮮戦争への関与は多大であった。旧日本軍が建設した飛行場が存在し、オーストラリア空軍 (豪空軍) の基地となっていた岩国もまた、国連軍の出撃基地となった。岩国は、往還する無数の軍機によって直接に戦場とつながった。

しかし、朝鮮戦争への日本の関与が指摘され、国連軍爆撃機が日本の基地から出撃した事実が想起される場合でさえ、横田や板付、沖縄までは人々の意識にのぼるものの、岩国の存在は忘れられていることが多い。そこで本稿は、時期を追って連合国による岩国占領と空軍基地建設、朝鮮戦争下の豪空軍と米空軍の動向をとりあげ、朝鮮戦争における岩国基地の役割とその地域住民生活に対する影響について考察する。

本稿が参照した資料は、個々の出典については註をつけて表示するが、概要は次の通りである。米軍・豪軍の動向に関しては、米国とオーストラリアで出版された軍事史的著作やパイロットたちの回想記、^{Australia War Memorial}オーストラリア戦争記念館 (WAM) が公開している資料、飛行機事故に関する民間のデジタル・アーカイブなどに加え、オーストラリアで多数の幅広い読者に親しまれていた大衆誌『^{Australia Women's Weekly}オーストラリア女性ウィークリー』を用い、女性従軍記者・戦争未亡人などに関するオーストラリア女性史の諸研究成果をも参考にした。また、占領軍の一員として日本に滞在した軍人の回想録として邦訳されている2冊の図書を参照した。1冊は1945年から1948年にかけて日本占領の英連邦空軍司令官として岩国に滞在したサー・セシル・パウチャーの回想を少将夫人レイディ・パウチャーが編集した、『英国空軍少将の見た日本占領と朝鮮戦争』(社会評論社、2008年)である。パウチャーは当時、岩国市横山にある旧岩国藩主吉川家の邸宅を接收して居住していた。もう1冊は、7か月間岩国で接收や建設工事の指揮にあたったバーナード・スミスの『1946年日本回想録～敗戦を乗り越えた人々～』(Sakkam Press, 2014年)である。日本側からの資料としては、岩国基地問題を扱う図書や論文、当時の新聞記事、1958年に日本政府機関である調達庁の職員労働組合が実施した「占領軍被害実態調査」を用いた。また、コロナ禍の最中である2020年8月に岩国を訪問し、元市会議員田村順玄氏と元徴古館館長宮田伊津美氏の御協力を得て調査を行った。その岩国で得た文献資料とともに、多くの方々からお話

を伺ったことが本稿を書き上げる大きな励みになった。

第1章 オーストラリア空軍の岩国占領と住民被害

第1節 英連邦軍の岩国進駐と Mustang の配備

連合国軍対日占領は、全体としては米国による単独占領ともいえるべきものであった。が、中国・四国地方に関しては、英連邦軍が占領を担った。英連邦軍は英国軍、オーストラリア軍、ニュージーランド軍、英領インド軍が構成し、広島県の呉に司令部を置いた。が、英連邦占領軍の空軍勢力である航空団 (Bcair) は、優れた航空設備がある山口県の「かつてのカミカゼ基地」に注目した。岩国飛行場は呉・広島にも近く、航空団司令部にとって地勢的にも望ましかったが、滑走路の長さが不足だとみなされた。そこで航空団は先ず防府基地に司令部を置き、岩国を持続的長期的に運用できるように拡充工事を開始する。工事を担う豪空軍第 81 ウイングの第 5 建設隊は、1945 年 12 月に岩国に到着した。真冬のことであり、太平洋の熱帯の島からやってきた隊員たちは日本の寒さに驚き、「薄っぺらな木造の小屋に身震い」⁽¹⁾ したという。英連邦占領軍は、岩国・防府に続いて島根県北部沿岸の美保飛行場も重要飛行場と位置づけ、整備工事を始めていく。さらに四国にも離発着のできる滑走路が置かれる。英連邦占領軍航空団の中心であるオーストラリア空軍 (Royal Australian Air Force: RAAF、以下「豪空軍」と略称) は、当初は戦闘部隊や輸送部隊など約 1500 人の規模で計画されていたが、飛行場拡張のために建設部隊が加わったので、その規模は 2000 人にまで膨らんだ⁽²⁾。

工事がある程度進むと、戦闘機の配備が始まった。1946 年 2 月末、豪空軍第 81 ウイング第 76 飛行隊の Mustang 戦闘機 16 機がボーファイターやモスキートを伴ってボルネオ島ラブアンを飛び立つ。これらはクラーク基地 (フィリピン) と沖縄を経由し、3 月初旬に岩国と防府に到着し、日本占領のための最初の英連邦軍機となった。続いて 3 月中旬、さらに第 82 飛行隊から新たに 25 機が加わった。その移動中の 3 月 18 日、悪天候の中、3 機の Mustang 戦闘機と 1 機のモスキートが沖縄から防府へ向かう途中、高知県の近海で墜落し、搭乗員 5 名全員が死亡する事故が起こっている⁽³⁾。その後、3 月下旬に第 81 ウイング第 77 飛行隊の Mustang が到着し、基本的な戦闘機配備が完了した。この Mustang 部隊が岩国に駐留する豪空軍の中心的存在となる⁽⁴⁾。

このように Mustang 部隊が続々と岩国に到来していた 1945 年 3 月、豪空軍岩国基地の開設に向けて、飛行場の周辺地域では占領軍の車両が猛スピードで疾走していた。岩国に住む幼い姉妹がその車両に衝突されて死傷したのは、3 月 20 日のことである。惨事は岩国飛行場のそばを流れる今津川に架かる寿橋の橋上で発生した。午後 3 時頃、岩国市中津大藪に住む藤元家の次女の寿子さん (11 歳) と四女の佳子 (3 歳) さんは、父母といっしょに自宅の近所を歩いていた。姉妹のほうが父母より約 50 メートル先を歩き、寿橋の上にさしかかった。そこへ占領軍車両が疾走してくる。危険に気づいた姉妹は壁際により、身を避けようとした。が、そのとき占領軍の後続車両が先行車両を追い抜こうとしたため、狭い橋の上で二台の車両が橋の巾いっぱいに並列する形となり、姉妹は橋の壁と後続車にはさまれ、圧されて転倒し、重傷を負ったのである。

姉妹はすぐに近くの病院に運ばれ、応急手当を受けた。ところがあまりに重篤で、小さ

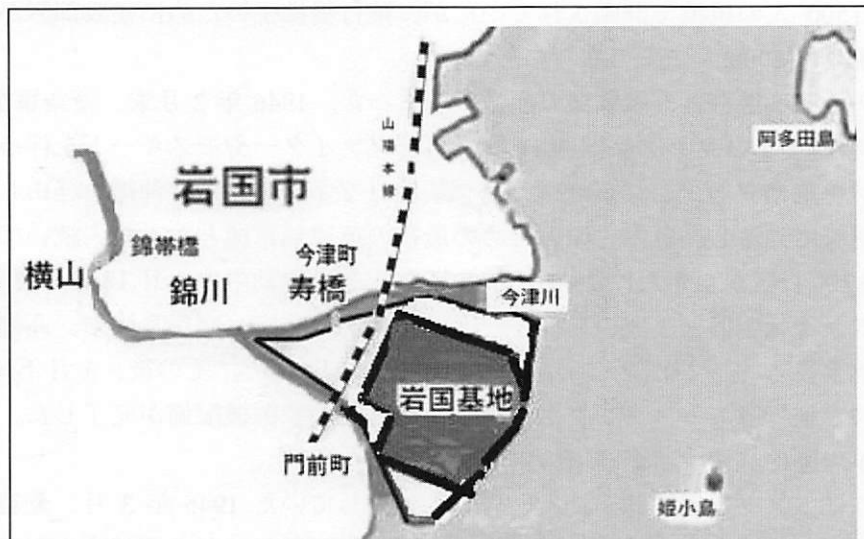
な病院では対応しきれない。医師の指示によって、姉妹は岩国病院に転送された。妹の佳子さんは内出血がひどく、岩国病院に到着後まもなく絶命した。姉の寿子さんは命はとりとめたものの、岩国病院に収容され、一か月に及ぶ入院生活を送ることになった。

事件から十年余り後の 1958 年に調達庁の労働組合が「占領軍被害実態調査」を行った際、父親である藤本常一さんが事件の状況を実態調査の回答票に次のように綴っている。

事故発生翌日英軍係官らしき者が見舞？実状視察？に来院致しましたが、何らの言葉も聴きませんでした。当時当方においては渉外局、日本側警察署、進駐軍憲兵隊に折衝致しましたところ、占領中なるの故を以て補償等については何らの成果を得ませんでした。被害当時の気持と致しましては親として燃野の雉子の例の通りの痛心この上なく、殊に焦心引揚後 2 カ月にしてこの惨禍に過く重々の不遇に先途に暗黒障壁を見る思いでした。入院費、葬儀費、墓標費等金銭上の負担も引揚者としての苦痛もさる事ながら精神上的の痛手は今も尚、亡き子の命日を迎える毎に堪へ難きものあるを感じます。(5)

文中にある「燃野の雉^{きじ}」とは、住んでいる野を焼かれたキジが自分の命にかえてもその子を救おうとするとところから、親が子を思う情の深いことの喩えである。幼い娘たちを失った父親の痛切な思いが伝わってくる。

地図 1
1950 年前後の
岩国基地
とその付近



当時、このような占領軍の交通事故に対しては日本の警察が捜査を行わず、被害者遺族が占領軍・日本政府に補償を求めても取り合わないのが普通であった。同様の事故は日本各地で多数発生しており、特に占領軍が駐留する地域では頻発していた。「占領軍被害実態調査」のファイルには、前述の事件の半年後に岩国で起きた事故の調査票も含まれている。飛行場に近い岩国市門前町に住む上野義人さん(8 歳)は、そのとき、友達の順一さんと小道にいた。英連邦占領軍の大型トラックが近づいてくるので身を避けたが、トラックの後方より、インド兵が日本の女性を乗せて運転するジープがフルスピードでやってきた。このジープは前方のトラックを追い抜くために加速し、トラックを走り抜けたときに右側にいた義人さんを跳ね飛ばして、田の中に転落。義人さんは脊椎骨折の大怪我を負

い、その十日後に息を引き取った⁽⁶⁾。

第2節 占領軍施設の拡充工事と快適な占領軍生活

占領軍のための工事は大規模であった。岩国、防府、美保の飛行場では滑走路の延長や全天候型の誘導路の建設、頑丈なエプロンを築く工事、格納庫その他の建物の修理や燃料設備の整備、道路の再建、宿泊施設などの建設、暖房や給水システムの整備などの飛行場拡張工事が続き、さらにまた軍人家族住宅の建設も始まった。第5飛行場建設中隊は日本に駐留する唯一の飛行場建設中隊として各地の工事に重宝され、当初は短期派遣の予定だったものが期間が延長され、増え続ける工事に対応した。これらの工事は占領軍の要求に基づいて日本政府が労働者を提供し、占領軍の建設中隊が設計・計画・監督を行った。

『オーストラリア女性ウィークリー』誌(1946年5月25日)には、同誌特派員が第5飛行場建設中隊のA.M. ハリソン中隊長たちに取材した写真入りの記事が載っている。それは「建設中隊の日本での素晴らしい仕事 滑走路からベッドまで、あらゆるものに挑戦」と題して、建設中隊の活躍ぶり伝えた。それによると岩国や防府や美保において技術者、建築家、配管工、電気技師たちが爆弾で被災した滑走路の補修から、傾いた木製ベッドを整える作業まで、中隊はあらゆる仕事に取り組んでおり、最初は143人だった中隊人員が現在は500人にまで増え、日本人は約3000人を労務に使役しているが言葉の問題で苦勞している、という⁽⁷⁾。英連邦軍における豪空軍の建設工事への貢献は際立っており、空軍副司令官バウチャーはこれに感謝したが、本国のJ.B.チフリー首相からは非難の言葉もあったという⁽⁸⁾。

飛行場や基地施設、家族住宅の施設増築・新築の工事費用は莫大な金額にのぼった。日本政府は占領軍の経費を賄うために「終戦処理費」として国家予算を組んだが、あまりにも過大な工事費が国家財政を圧迫した。第一次吉田内閣の蔵相石橋湛山は終戦処理費の削減を主張し、1946年11月25日には「終戦処理費についての連合軍最高司令部への申入」が閣議了解されている。無秩序で過剰な請求によって「連合軍の関係工事に従事する工事施行者が不当の利益を収める結果となること」や占領軍の娯楽施設が「本邦の産業の復興、民生の安定を犠牲として着着整えられて行くと感の一部国民に与えていること」、さらに「既に憲法によつて戦争の放棄を宣言せる我国で、進駐軍は何故かくも各所に大規模の軍事施設を構築するかとの疑問も民間には抱かれつつあります」ことをも指摘し、GHQに再考を促す内容であった⁽⁹⁾。だがGHQは、1947年4月に石橋を公職から追放し、以後の歴代蔵相は終戦処理費を黙認し、占領軍に追随していった。

戦災や引き揚げ、失業、インフレといった敗戦後の国民的生活難の時代にあつて、占領軍工事のために働く労働者を集めるのは容易であった。占領軍が指揮する軍事労務であるだけに危険も大きかったが、それでも多くの人が働き、しばしば労働災害も起きた。典型的な労働災害のひとつは、トラックの「上乗人夫」の落下である。占領軍は物品を運ぶのと同様、トラックの荷台に労働者を満載して運ぶのが常であった。占領軍車輛は概して猛スピードで疾走し、しかも飲酒運転をはじめ無謀運転が多かったため、作業現場への往路や復路で「上乗人夫」たちはしばしば荷台から墜落した。前述の「占領軍被害実態調査」のファイルを見るだけでも、この類型の死者が全国で24人にのぼる。岩国では、今津町に住む井出久四郎さん(22歳)が1947年1月4日、トラックの上から荷物と一緒に転落

して即死するという事件が起きている。兄の井出十郎さんは、こう回想する。

丁度道路の曲り角でトラックがまがる時に荷物と一緒に振り落されたのだそうです。数人一緒に乗って居た様で落ちたのも2、3人居たそうで、即死は一人だけです。もう一人重傷で後から死なれたとか。何とか一寸ききましたがよくは知りません。帰えりがおそいので心配して家の前まで出て見ては待って居た所に死んだとの知らせ全くぼうぜんとしました。朝元気で出て行ったのに死んだとは全く信じられません。何んとも云ひ様のない悲しみでした。弟と二人で鉄工所を開いたばかりの所でしたので一人になってはとても続けて行く事が出来ず、とうとう工場はやめて今は勤めに出ています。大変大きな損害です。(10)

このような労働災害はバウチャーやスミスの回想⁽¹¹⁾にもハリス中隊長のインタビュー記事にも登場しない。また日本の新聞は当時、占領軍労働災害をほとんど報じなかった。

占領軍人の岩国での生活は特権を与えられており、非常に快適で楽しいものだった、と伝えられている。基地内の宿舎では部屋係の女子従業員が掃除や洗濯の世話をし、占領軍コミュニティではパーティーや食事会などの社交生活も盛んで、音楽や観劇といった娯楽も多く、ラグビーやスカッシュ、クリケット、テニス、バスケット、バドミントン、水泳、サッカー、フットボール、卓球、ボクシング、ビリヤードなどスポーツの楽しみもあった。ラジオからは豪空軍コミュニティ向けの放送もあり、本国のニュースも伝えられた⁽¹²⁾。将兵の間では芸者遊びや買春が行われており、英連邦軍指導部は性病罹患率が高いことを危惧して岩国に軍経営の「慰安所」設置さえ検討していた⁽¹³⁾。他方、英連邦軍の軍人家族にとっては英連邦軍占領下の日本は快適に暮らせる場所だったようだ。『オーストラリア女性ウイークリー』誌(1947年12月6日号)には、同誌編集者アリス・ジャクソンの「オーストラリア人家族は日本での生活を楽しんでいる」という記事が載っている。

彼らは、アメニティが揃い、仕事をする家政婦がいる快適な家に住んでいる。

「世界のでっぺんにいるような心地」...「ここは他のどこにも替えがたい場所」...「本当に良すぎる」..「まだ信じられない」。これは、英連邦占領軍のオーストラリア人の妻たちの、「日本での生活はどうか」というの質問に対する典型的な答えだ。

幸せそうな女性たちと元気いっぱい若者たちのコミュニティーを訪れるのは、とても楽しい経験だ。ほとんどの妻たちは戦時中、夫と長い間引き離されていた。彼女たちの多くは、初めて普通の家庭生活を経験している。戦時中に結婚した彼らは、オーストラリアの厳しい住宅事情の中で、あらゆる不満や不快感を経験してきた。しかしここでは、魅力的な調度品と優れた設備を備えた家が割り当てられている。私はすべての家族が居住する地区を訪問したが、どこに行っても、実質的には同じ話をしてきた。江田島、呉、^{ひろ}広、岩国、岡山、防府で、そして休暇センターでの休暇で、私が会った家族は皆、彼らの快適さのために用意された設備と、居住地区を担当する様々な将校たちの絶え間ない注意力を称賛していた。各家庭には使用人がおり、妻たちは家事の悩みから解放され、時間が重くのしかかることはない。「やりたいことがあっても、一日の長さが足りなくて、あっという間に過ぎてしまう」と彼女たちは言う。ど

の地区にも、住宅、学校、医療支援センター、歯科・病院、写真展、家庭用品・ギフトショップ、クラブ、テニスなどの補助サービス、陸軍教育、食堂、バス輸送、「Y」ホステル、レッド・シールド・クラブ、赤十字社など、同じような施設がある。

住宅はアメリカ人の計画を基礎に、オーストラリア人の技術者がポーチなどの外装に細かい手を加えて設計された住宅で、住宅群にバラエティを与えている。

独身用、二人用、四人家族用の家がある。割り当てられる家の大きさは、その家に住む家族の規模によって決まる。

階級に対するコンセプションは、公務で重要な来賓を一時的に宿泊させるなど、多くの接待を伴う高官の場合だけだ。

ほとんどの地区ではまだ工事が進行中で、それぞれの地区で住宅建設が忙しく続いているが、12月末までにはすべての工事が終了する予定だ。(14)

第3節 占領軍の軍事演習地となった岩国

大規模な工事によって岩国飛行場の拡張と軍人家族住宅の建設を実現させた英連邦軍は、1948年3月に航空団の本拠を防府から岩国に正式に移転させた。他方、占領軍住宅の快適さを讃える記事が『オーストラリア女性ウィークリー』誌に登場した1947年末前後から、英連邦軍は漸次、本国への撤収を始めている。英領インド軍が1947年に帰国（その後独立）、1948年にはニュージーランド陸軍が帰国し、1949年の半ばまでにオーストラリア以外のすべての国の部隊が帰国し、岩国に基地を置く豪空軍が英連邦軍の主力の位置を占めるようになった。

表1 射撃場・爆撃場を指定した SCAPIN 一覧

年月日	No.	指定された地区	覚書の表題
1946/3/22	833	北海道・本州・九州近海3地域	空中射撃場
1947/5/10	1662	九十九里浜沖	高射砲発射場
1947/9/16	1778	竹島<独島> 日本海	竹島爆撃場
1947/11/15	1820	大野原島（伊豆諸島・三宅島西方）	大野原爆撃・地上射撃場
1948/6/10	1907	三沢（青森県）	空対空射撃場
1948/6/10	1908	千歳（北海道）	千歳空中射撃場
1948/9/1	1907	三沢	北部本州空対空射撃場
1948/11/29	1945	新潟県沖	空対空射撃場
1948/12/10	1948	千歳	空中射撃場
1948/12/28	1952	姫子島（山口県岩国市）	姫子島爆撃・射撃場
1949/2/23	1974	水戸（茨城県）	水戸空対地射撃・爆撃上
1949/3/1	1976	三沢	三沢爆撃・射撃場
1949/4/4	1989	米子（鳥取県）	米子空中射撃場
1949/4/12	1992	鳥島（長崎県）	鳥島爆撃・射撃場

連合国対日占領は、その最初から、連合国側が進駐以前に想定していたような占領軍に

対する抵抗が起きなかった。よって、占領目的であるとされた日本の非軍事化や民主化を実現するために連合国が軍事行動を起こす必要はなかった。しかし連合国最高司令部は、占領直後から日本各地にあった旧日本軍演習場で自軍の軍事演習を始め、旧日本軍演習場以外の土地・海面をも新たに接收して、射爆場として一方的に指定し、軍事演習を行った。表に示したのは、SCAPIN（連合国軍最高司令部指令）が射撃・爆撃のために指定した地区のリストである。このような軍事演習は、日本の非軍事化や民主化という国際社会に表明された「占領目的」のためではなく、もっぱら連合国軍傘下の軍隊の戦力向上を目的として実行された。実弾の射撃・砲撃演習が行われる中、演習場・射爆場とその周囲では、地域住民の漁場や農地が取り上げられたり、不発弾や流弾で住民死傷者が出るなど、地域の人々の生活が脅かされた⁽¹⁵⁾。

岩国では、岩国飛行場の沖合にある姫小島という無人島が1948年6月16日付けの連合国最高司令部の覚書SCAPIN - 1952によって射砲撃場（Air Bombing and Gunnery Range）として指定されている。島周辺の半径2000ヤードの隣接する水域は爆撃危険区域とされた。この海域を最良の漁場とする岩国、由宇、通津3市町村の漁業は打撃を受けた。この爆撃演習で漁業ができなくなり、損害を受けた漁業者は約1千名にのぼった⁽¹⁶⁾。姫小島は今日では在日米軍の弾薬処理場になっている。かつてはのどかな小島だった姫小島は、爆撃機の標的とされて激烈にロケット攻撃などが繰り返される歳月の中、破壊が進んで形も変わり、見る影もない無惨な姿に変わっていった。

岩国に拠点を置いた英連邦軍航空団について見れば、豪空軍が飛行機で瀬戸内海の監視パトロールを行っていた。が、それは朝鮮半島から日本に入国しようとする人々を見つけて捕えるといった内容であり、日本の非軍事化・民主化という公式に声明されている占領目的の理念とは無縁の、脱植民地化過程での人々の自由な往来を妨げる治安行動であった。そのほかの飛行任務といえば、たまにVIPの護衛飛行やパレードや飛行ショーのようなイベントが行われたりするだけなのである。実際には豪空軍の飛行隊は軍事訓練のために日本に駐留しているようなものであった。

朝鮮戦争に岩国から出撃した豪空軍第77飛行隊パイロットの一人であるミルト・コティは、オーストラリアで飛行訓練を受けてはいたが、第77飛行隊に配属されて岩国に到着して初めて、武器を実射する訓練を経験した。コティは、オーストラリア戦争フィルム・アーカイブのビデオインタビューにおいて、「平時の英連邦占領軍における77戦隊の役割は何でしたか、何のためにそこにいましたか？」との質問に対して、占領軍の飛行隊が日本の地を飛び回り、目に見える存在としてそこにいること自体に意味があったと指摘し、「日本が占領されており、マッカーサーと占領軍によって異なる方向に操縦されていることを、日本人に示さねばなりませんでした。私たちは日本占領の目に見える重要な存在でした」と語っている。占領政治においては、軍事力の誇示がそれ自体に政治的価値を持った。だがその一方、コティ自身が明かしているように、岩国は若いパイロットが初めて戦闘訓練をする場所であった事実を見落とすことはできない。彼は、岩国におけるムスタングの爆撃訓練について、こう語っている。

内海に小さな島があり、それを（砲撃演習の）ターゲットとして使いました。この小島に爆撃と機銃掃射の標的を設置しました。セオドライト[測量マーカー]が付いた

幾つかの離れた点などを使うことで、爆弾が当たった場所に影響を与え、誤差を計算できます。私たちはそれをたくさんやりました。ムスタングで初めて銃を撃ったときはどうなるのかまるでわからなかったのも、それ自体が興味深いものでした。(中略)舗装道路を運転していて突然荒れた砂利にぶつかった場合、車で発生するのと同じ種類の騒音と振動。ほとんど同じ感じです。騒音はそれほどでもありませんが、機体を通して振動が感じられます。(17)

オーストラリアの軍事史家ステファンは、すこぶる率直に、豪空軍の軍事訓練は「日本国民には何の意味もなかったかもしれないが、豪空軍にとって大きな意味があった」(18)と述べている。オーストラリアにおいて多くの空軍部隊はオーストラリア政府が軍に冷淡であったため資金の不足と方向性の欠如に苦しんでいた。だが日本駐留中の第 81 ウィングは例外的に、空軍パイロットと技術者が集中的に首尾一貫した訓練のために十分な援助を与えられた。かくしてウィングは正式な訓練サイクルが開始できて、ほとんどのパイロットは毎月約 21 時間飛行し、爆弾、銃、ロケットを使用して空爆と空対空作戦の戦力を維持・向上させることができた。そして、この軍事訓練が、次節で説明するように、朝鮮戦争が勃発するやいなや直ちに岩国から豪空軍が出撃する準備として「かけがえのない」経験になったのである(19)。

そんな軍事訓練の中で落命する軍人もいた。1948 年 12 月 3 日には、豪空軍第 77 中隊のローランド・ラザフォード・ヒル(26 歳)の乗るムスタングが爆撃練習場でロケット訓練中に墜落した。ヒルは来日して 2 年半になり、当時は妻と幼い娘二人と岩国で暮らしていたようだ。遺体は横浜の英連邦戦争墓地に埋葬されている(20)。

朝鮮戦争開戦より 2 ヶ月ほど前の 1950 年 4 月 17 日には、岩国で軍事訓練中の英海軍機第 827 飛行隊のファイアフライと豪空軍第 77 飛行隊のムスタングが広島湾の訓練海域で空中衝突する事件が起きている。ファイアフライは岩国沖に碇泊する英連邦軍空母トライアンフの艦載機である。ファイアフライに乗っていた下士官スタンレー・W・ギブソンは死亡し、パイロットの A. ベイリーは脱出の際に腕を折ってゴムボートを膨らませることができずにいたのを日本の漁船に救助された。編隊飛行訓練でムスタングを操縦していた飛行中尉 W.リバーズは無事に脱出し、日本の漁船と水陸両用艇に救助された(21)。第 77 飛行隊のリバーズはこの事件が計画外の「空中戦」であったと回想している。

空母トライアンフの海軍戦闘機と飛行区域を共有することを知らされ、常に誘惑的な「空中戦」の楽しみに耽ったりしないように、と命じられた。おそらく海軍パイロットはそう説明を受けていなかった。それで編隊飛行の間に訓練区域 8,000 フィートで私たちは突然複数の英海軍戦闘機に「攻撃」された。訓練生に機体の接近を指示するのは無謀だったので、私は直進して「敵」に立ち向かうように指示した。(22)

あまりに危険で迷惑な「訓練」であり、実際に人命が失われている。付近の漁業者たちの立ち入りを禁止して岩国沖合で実行されていたのはこのような軍事演習であった。

第2章 オーストラリア空軍の朝鮮戦争出撃

第1節 岩国に駐留する第77飛行隊 Mustang による空爆

1950年6月25日、朝鮮人民軍は38度線を越えて南進を開始した。岩国の豪空軍第77飛行隊はすでに占領任務を完了し、折しもパイロットたちは送別パーティーを開き、妻たちは帰国や休暇のために旅支度をしているところであった⁽²³⁾。第77飛行隊は米国第五空軍の指揮下にあるため、急報を受けて、すぐにスタンバイした。

当時、日本占領米軍には主力の戦術戦闘機としてジェット機 F-80 があった。だがジェット機は韓国の飛行場での運用が難しかったため、戦闘機は日本から発進させる必要があり、プロペラ機が望ましかった。Mustang であれば並はずれた射程距離と耐久性を備え、戦略爆撃、戦術爆撃、近接支援、偵察飛行、護衛飛行と用途の幅が広い。その Mustang 飛行隊が配備され、朝鮮半島に近く、しかもスタンバイできているのは占領軍の中で唯一、岩国駐留の豪空軍第77飛行隊だけであった。Mustang で飛べば、岩国から韓国への所要時間は約45分であり、最長5時間半の飛行が可能であった。極東空軍司令部司令官ストラテマイヤーと連合軍最高司令官マッカーサーは、朝鮮戦争のために豪空軍の長距離地上攻撃機が必要不可欠であると考え、第77飛行隊を戦闘任務につけるようオーストラリア政府に要請した。オーストラリア政府は自国が米国の有力な同盟国であることを示すために応諾した。かくして第77飛行隊の朝鮮戦争への出撃が決まり、この戦争で戦闘に参加する豪軍最初の部隊になったのである。

豪空軍第77飛行隊が最初に岩国から朝鮮半島へと出動したのは、7月2日の夜明け前であった。米軍輸送機 C-47 の護衛に加え、米軍 B-26 爆撃機によるソウル近郊における鉄道橋爆撃の支援が行われ、38度線以北のパトロール飛行も敢行された。早くも出撃2日目の7月3日、「友軍誤爆」事件が起きている。司令官ルイス T. スペンスが率いる8機の Mustang は鳥山と水原の間にある道路と鉄道を空襲し、そこにいた米軍・韓国軍をも「誤爆」したのである。スペンスは敵軍がこれほど南にいるのかと疑念を抱いたが、第五空軍の管制官が何度もその標的を確認したので、指示通り空襲した。機関車を線路から吹き飛ばし、多数のトラックを破壊する。任務を終えて岩国に戻った後、スペンスたちは実は彼らが韓国軍と米軍を誤爆したのだと知らされた。この事件は第五空軍司令部が指示の過失を認め、第77飛行隊に謝罪して幕引きとなった⁽²⁴⁾。

それからまもない第77飛行隊への武勲表彰が示しているように、このような誤爆は国連軍の内部では瑕疵にもならなかった。だが韓国における真実和解委員会の調査活動や金泰佑氏らの研究が明らかにしているように、国連軍機の空爆は「友軍」のみならず、膨大な数の民間人を巻き込み、殺傷している事実を看過することはできない。地上の民間人たちにとっては、国連軍からの空爆はとてつもない規模の破壊と殺傷をもたらす恐ろしい災禍であった。7月6日には、国連軍の空爆によってソウル南方の平澤駅^{ピョンテグ}の一角が廃墟になる。南進する朝鮮人民軍に対して、敗走する国連軍は橋や駅を破壊して人民軍の移動を阻止する作戦を実行した。7月6日午前9時、国連軍は自軍の部隊が平澤を離れるやいなや、平澤のトンボク川に架かる橋を爆破して人民軍を渡れなくし、さらに平澤駅への空爆をも行った。平澤の住民は豪空軍が上空に現れた最初、「友軍」が来たものと思って上空に手を振ったという。だが何たることだろうか、その飛行機は平澤駅鉄道をはじめ、当時

の平澤の中心地だった原^{ウォンピヨンドン}平^{ピジョン}洞と平澤洞・碑前洞一帯を爆撃し始めた。投下された爆弾とともに平澤駅で積み下ろされる予定だった弾薬や爆弾も爆発し、平澤駅と鉄道は灰燼に帰してしまった。(25)

(国連軍の空爆で廃墟となった平澤駅一帯。
1950年7月6日)



▲ 韓国전쟁 당시 UN군의 평택역 오목사건, 폐허가 된 평택역(1950년 7월 6일)

韓国軍第17連隊長白仁燁^{ベクイニョブ}も負傷するなど、この平澤爆撃による韓国軍関係者の死傷者は200人に上った。韓国軍第三歩

兵師団長を最後に現役を退いた後、国防部戦史編纂室委員長をつとめた朴定仁^{パクチョンイン}は、回顧録の中で朝鮮戦争下の「アメリカとオーストラリアの戦闘爆撃機による誤爆」を次のように回想している。

振動と鼓膜を破る爆音、周辺の家屋があっという間に燃え落ちるのを見ながら、生命の奥深さをひしひしと感じた。帰りに水原駅に設けられた移動給食所で供給状態を確認してから、今度は、北朝鮮のヤク戦闘機が出現して爆撃したため、再び死にかけの状況を体験した。血を流して倒れている戦友の死体を見ながら私は生き残ったが、むしろ申し訳ない状況だった。誤爆被害が増えると、私たちはすぐに米顧問に強く抗議した。彼らは「わざとしたのではなく、あくまでも誤爆だ、白い木材などを地面に敷いて対空標識にすると識別がよくなるだろう」と言った。しかし、米軍と豪軍の戦闘機などの国連軍による誤爆はなんと一週間も続いた。この時私たちは、豪軍飛行機をオーストリアの飛行機だと思っていて「妻の実家飛行機」と呼んだりした。李承晩大統領の妻であるフランチェスカ夫人が、オーストリア出身なので、そう名づけたのだった。(中略) 米軍機と豪空軍機が続けた誤爆は、後でその原因が判明した。パイロットたちが漢江以北を攻撃するように命令を受け、錦江を漢江と勘違いして味方の基地を爆撃したということだった。このため平澤駅では北上していた列車を攻撃し、列車に積載されていた105mm榴弾砲の砲弾が一日中連鎖爆発したため、市街地が丸ごと焼け野原になってしまった。(26)

この平澤空襲に第77飛行隊も参加した。7月6日、ケン・マクロード、ミルトン・コティらはムスタングに砲弾を満載して岩国から発進し、航空管制機モスキートから朝鮮人民軍の戦車隊の渡川を阻むために平澤の橋を攻撃するよう指示を受けた。彼らの編隊は橋に接近し、橋を渡る戦車隊に対して各機6個のロケットを発射し、戦車隊と橋に損害を与えた。そのときはもう燃料が乏しくなり、夕闇が迫っていた。そこで彼らは岩国へ帰るのを諦め、モスキートに大田飛行場へ誘導されて同地に泊り、翌日岩国に帰還した(27)。

第2節 空からの民間人虐殺

第77飛行隊は以降の3ヶ月間、銃やロケット弾やナパーム弾を装備して岩国から出撃し、戦場で爆撃任務を遂行した。 Mustangが岩国を夜明け前に離陸し、38度線の南北で多ければ6度にもものぼる戦闘行動を行い、大邱飛行場で給油や短い休養をとって、暗くなってから岩国に戻っていく。コティは1日に何度も出撃するのは身心をすりつぶす激務であったと回想している。朝鮮戦争開戦後、そんな軍事行動が第77飛行隊の日課のようになった。姫小島での演習で磨かれた豪空軍の空対地攻撃のスキルは、このようにして実戦に役立てられたのである。岩国基地の豪空軍地上スタッフたちも、翌日戦闘のために戦闘で損傷した機体を修理して一晩中働くことも珍しくなかった。韓国の大邱飛行場がターンアラウンド基地の役割を果たし、飛行隊員は大邱で休息をとったり燃料を補給するなどして再び出撃していった。

オーストラリアのメンジーズ首相は1950年8月に英連邦軍司令部のある呉を訪れ、第77飛行隊の朝鮮戦争における貢献を讃えている。首相は世界を旅行する間に朝鮮戦争で活躍中の第77飛行隊こそ「オーストラリアの最高の海外広告」だと気づいたと語り、飛行服姿のパイロットたちと歓談し、飛行隊長のスペンスに、豪空軍の最も熟練した部隊に授与されるグロスターカップを正式に贈呈した⁽²⁸⁾。第77飛行隊は同8月末までに朝鮮人民軍の戦車35台、トラックその他の車両212台、機関車4輛台、燃料投棄場15カ所などの軍事目標を破壊する戦果を挙げた⁽²⁹⁾。

が、国連軍による空爆は38度線以南においても無差別爆撃による焦土化作戦として展開し、軍事目標のみならず、一般市民を巻き込んだ。非軍事的諸施設や田畑をも破壊し、莫大な数の民間人が殺傷されていった。「人民軍の兵士が隠れているかもしれない。人民軍の支持者が紛れこんでいるかもしれない」。こうした一方的な疑念によって国連軍は韓国各地で避難民を銃撃したり、村々に対する焼き討ちや空爆を行った。朝鮮戦争下の空からの民間人虐殺は、今日までに多数の事案が知られている⁽³⁰⁾。岩国から出撃した豪空軍第77飛行隊もまた、そのような国連軍の無差別爆撃の一翼を担った。非戦闘員への攻撃やナパーム弾の使用は国連軍について、コティは、オーストラリア戦争フィルム・アーカイブのビデオインタビューにおいて、航空管制機や偵察機から避難民や村人たちを攻撃するように指示を受けて攻撃を実行した経験を語っている。

避難民たちの多くは行き場がなく、山の尾根に沿って群れになり野営している人が大勢いた。(中略) 偵察機やモスキート機が、群れの中にいるのが主に韓国人だと十分知っていながら、この大勢の人たちを撃ち殺そうとするような状況が展開したものです。なぜ管制官が私たちに避難民を撃つように言ったのか？ 北朝鮮人が避難民の中に潜入し、避難民を覆いとして使っていたからです。

私たちが(避難民を)攻撃するのを嫌がっていたので、モスキート管制官は「カモン、オッシー(オーストラリア人)。今夜、あの中に隠れてる連中は(国連軍の)仲間を地上でひどい目にあわせるつもりなんだ。やっつけろ」と言う。そんなことが起きてました。そうやっても北朝鮮人のごく一部しか打ち負かせないかもしれないのに、避難民への攻撃を要求するような偵察管制機と組むなんて、酷い状況でした。

(31)

コティたちは普通の村人に見える韓国人たちをターゲットにしたこともあった。

尾根にある小さな村でした。水田が一面に広がっていましたね。村には広場がありました。白い服を着た人たちや面白い帽子（を被った人々）が見えて、広場は賑わっていました。横を飛ぶ偵察機が、「あれがターゲットだ。できるだけたくさんやっつけろ。私たちは、大勢の（朝鮮人民軍の）歩兵があそこへ入って行って白い服を着ているのを見たんだ。おそらく彼らはみんな北朝鮮人だ」と言うわけです。(32)

そのときコティは「そうかもしれないと思ったが、よくわからなかった」。指示通り村を銃撃したものの、白い服の人々はそこに立ち尽くしていた。コティたちは銃撃を受ければ軍人の通常の反応として逃げるものと思っていたが、その人々はそうしなかった。豪空軍のムスタングが低高度で飛ぶ度に、彼らは上空のパイロットたちにお辞儀をしていた。

ナパーム弾の使用について問われると、コティはこう答えている。

非常に効果的な武器ですが、状況によって非常に残酷です。使いたくはない。（中略）ナパームは有効で、役立った。私たちは韓国の一隅にまで後退しており、すぐに追い出される脅威があった。初期の地上の事態を観て考えると、ナパームを最大限に効果的に使うことに何の良心の呵責もなかった。トラックや装甲車両、戦車の破壊に効果がある。ナパーム弾の攻撃に耐える戦車はほとんどないです。(33)

ナパーム弾は確かに対戦車兵器として重宝された。だが同時にそれは恐ろしい対人兵器でもあった。着弾すると燃えているナパーム弾が広がり、排水溝、灌漑用水路、塹壕その他、人々が隠れる所のどこにでも火焰が及び、焼き払い、人間を殺傷するからである。朝鮮戦争下に国連軍が使用したナパーム弾は日本で調達されている。1951年3月1日に米国陸軍第八軍の最高化学責任者ナルド・D・ボート大佐は、軍事史編纂センターのインタビューに対して、朝鮮戦争で用いられたナパーム弾について、「米軍のナパーム爆弾は日本製です。プラスチック製で、費用は各40ドルかかり、100ガロン入りです。今は90ガロン入りの新しい爆弾が作られています」と説明している(34)。

第77飛行隊は日本製のナパーム爆弾を積んで岩国を飛び立ち、朝鮮半島で無数の爆弾を投下した。飛行隊長スペンスが9月9日に戦死したとき、彼が率いるムスタング編隊は、韓国東海岸の浦項に近い安康に200メートルという低高度から急降下してナパーム攻撃をしていた。この急降下爆撃の際、スペンスのムスタングは地上から反撃を受け、安康里に墜落し、スペンスの消息は絶たれた(35)。国連軍が9月15日の仁川上陸作戦で優勢に転じ、国連軍の北朝鮮爆撃が強まる中、第77飛行隊のナパーム攻撃も続く。たとえば9月22日には北朝鮮の新幕への攻撃が行われた。午前11時25分に8機のムスタングが岩国を出発し、人民軍がいるらしい村を破壊し、約500人の「敵軍」を機関銃で機銃掃射する。その後、鉄道のトンネル内部や機関車車両基地に対するロケット攻撃をも行った。このあとムスタング編隊は岩国離陸からわずか約3時間25分後に岩国に帰還したという(36)

第3節 岩国在住の豪空軍パイロットの妻たち

戦争はしばしば「ウイドウ・メーカー」（未亡人製造屋）と呼ばれる。朝鮮戦争勃発後、岩国に住む豪空軍パイロットの妻たちは夫の身を心配する緊張の日々を送った。ケン・マクロードやミルトン・コティたちが平澤爆撃の後で大田に足止めになり、「行方不明」と知らされた夜も、家族には恐怖の一夜であった。開戦直前、妻たちは荷造りにいそしんでいた。戦争が起きなければ、占領任務を解かれた夫とともに家族旅行を楽しんだり帰郷していただろう。が、戦争が始まり、連日出撃する夫を見送る妻たちには心の安まらない日が続く。当時、岩国基地に暮らす「パイロットの妻」は十数人いた。『オーストラリア女性ウイークリー』（1950年7月29日号）の「ムスタングのパイロットの妻たち、帰還機の数を数える」という記事に、昼食会に集った妻たちの写真が載っている。

(写真1) 左からJ・I・アダムス夫人のボニー、C・R・ノーブル夫人、スチュアート・ブラッドフォード夫人と娘のジョセリンとダイアン、ナンシー・スタウト、レオ・ブラウン夫人



前述のとおり、岩国在住の占領軍人家族は厚遇を受け、生活はかなり快適なものであった。軍の内部には性病感染の増大を懸念して岩国に軍隊「慰安」所を置こうといった意見もあったが、日本人との交際を制限し、本国から妻子を呼び寄せて同居させることで軍人の士気が高まるという考えも強かった。かくして妻たちの多くは夫のいる日本に移住し、すでに2～3年間岩国で暮らしていた。ケニス（ケン）・マクロードとメアリーは大戦中に結婚して子どもたちも生まれ、家族で岩国で暮らして3年になる。グラハム・ストラウト夫人のナンシーも、来日して2年が過ぎていた。グラハムはオーストラリア南部のアデレードの出身で、大戦中から戦闘機に乗り、占領軍の一員として岩国にやってきた。1947年に本国で結婚。その後、夫妻は日本に戻り、岩国の将校宿舎に住んでいた。中には日本で出会って結婚し、岩国基地の中で新婚生活をスタートさせたカップルもいた。アダムス夫人は元々英連邦軍軍人家族のための教育サービスの一員として来日し、1949年にベイ

・アダムスと結婚した。ノーブル夫人は1948年1月に豪空軍の看護サービスで来日し、1949年4月に日本で結婚。ホースマン夫人も同年11月に結婚している。コティ夫人とスペンス夫人は来日して日が浅かった。エラ・コティは、来日の申請が受理されてようやく木曜(6月29日)の夜に岩国に到着したが、次の日曜(7月2日)にはもう夫は戦場へ飛び立つ慌ただしさだった。ヴァーノン・スペンスもエラより少し後、幼いペニー(8歳)とジョン(4歳)を連れて来日した。

(写真2) 左からケン・マクラウド夫人メアリーと娘マリー、T・マクルーハン夫人、L・T・スペンス夫人と息子のジョン、W・ホースマン夫人、コティ夫人のエラ

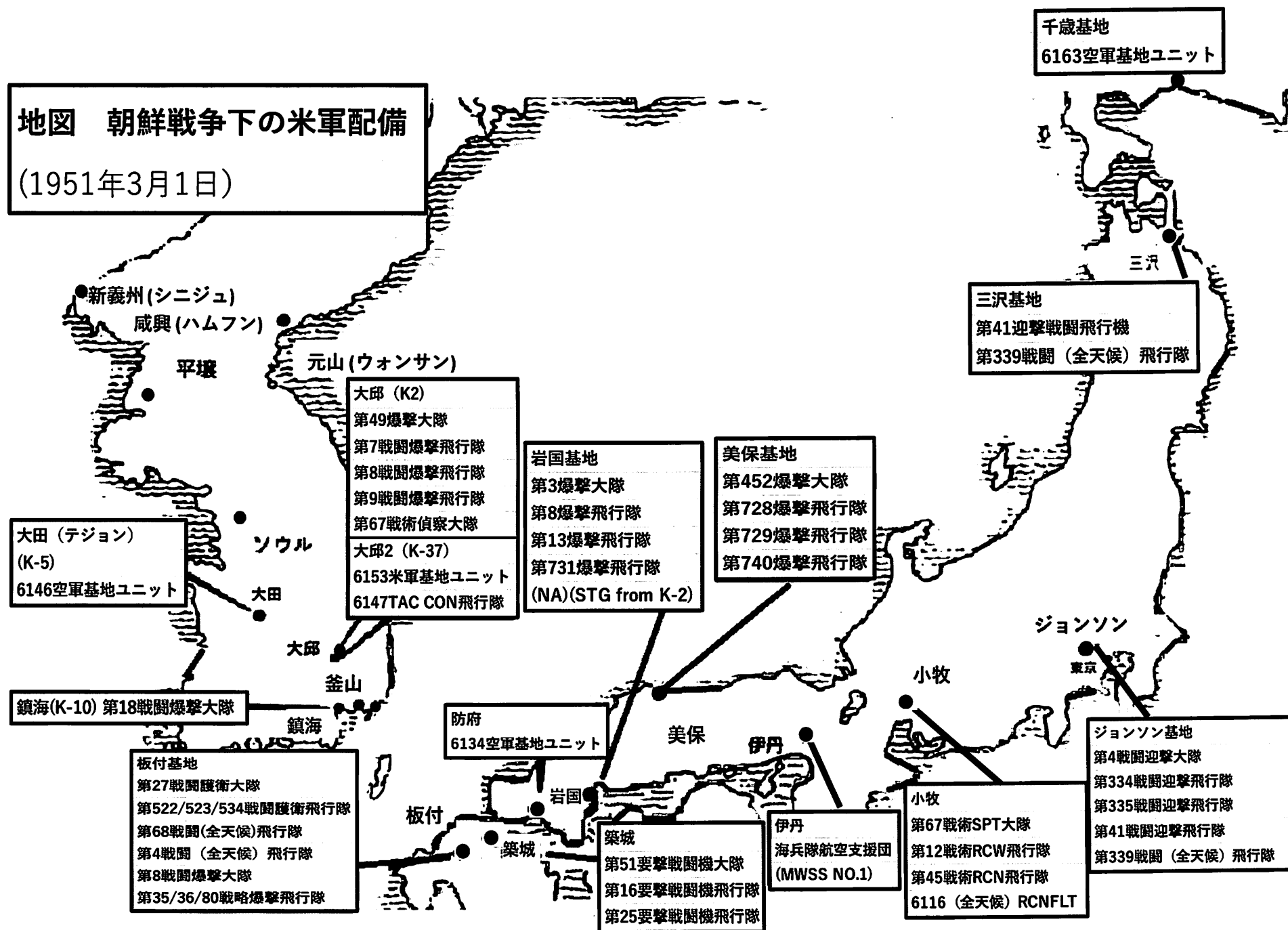


女性たちは、朝には二度と逢えないかもしれないと怖れながら夫たちを送り出し、夜に Mustang が基地に戻ってくる時には全機が無事に帰還できたか確かめようと一心に機数を数えていたという。ヴァーノンは悲劇的な事には言及しないことを条件にスタンリー記者の取材を認め、「夫たちを心配するのは当然だけど、他のことで頭をいっぱいにしておかないと心配が高じるだけ」だと記者に語っている。この写真を撮影したとき、ナンシーは夫が「行方不明」だと知らされていたが、それでも生還を待っていた。現にコティたちも一時「行方不明」になったものの、すぐに岩国に帰還してきたではないか、と(37)。

しかしグラハム・ストラウトは朝鮮戦争における英連邦軍最初の戦死者となった。7月7日、Mustang 編隊を率いて岩国を飛び立ち、^{サムチヨク}韓国の東海岸にある三陟付近で鉄道を空襲中、彼の Mustang は突然黒煙をあげて墜落し、この写真が撮影されたときはもう死亡していた。12月になって遺体が発見され、1月に釜山で埋葬されている(38)。そして、前述の通り、ストラウトの死から2ヶ月後にスペンスもまた帰らぬ人となるのである。

地図 朝鮮戦争下の米軍配備

(1951年3月1日)



第3章 岩国基地近隣の国連軍機事故被害

第1節 米軍第3爆撃大隊の岩国移駐

朝鮮戦争開戦以降、米国は日本占領軍の配置を戦争出動に応じて再編していった。

地図は、極東空軍（Far East Air Force: FEAF）最高司令官の戦争日誌『ストラトマイヤー朝鮮戦争回顧録』を元に作成した。同書には極東空軍の配置を示す地図が三種類あり、1950年7月2日、同年11月1日、1951年3月1日における配置状況を示している⁽³⁹⁾。1951年3月1日付の地図がそれまでの2種の地図と大きく異なるのは、地図上から横田基地と立川基地が消え、九州北部の築城基地や英連邦軍占領地区にある中国地方の美保基地や防府基地が初めて書き込まれ、岩国基地に関していえば豪軍基地としてでなく、米空軍の第3爆撃大隊⁽⁴⁰⁾とその飛行隊の基地として示されていることである。

開戦以前、岩国基地は豪空軍の基地であった。しかし朝鮮戦争に伴う米軍再配置によって、朝鮮半島に至近の九州・中国地方の基地に米空軍の戦闘・爆撃部隊が集中され、岩国基地に第3爆撃大隊が移駐する。

第3爆撃大隊は、朝鮮戦争最初の爆撃出撃から停戦協定調印直前の、最後の爆撃まで参加した。6月28日の文山空爆^{ムンサン}をはじめとして韓国各地で鉄道や橋梁の爆撃を始める。この日、朝鮮戦争における最初の米空軍戦死者が出ている。第3爆撃大隊は翌29日には38度線を越えて北朝鮮を空襲し、平壤飛行場にあった朝鮮人民軍の飛行機を破壊した⁽⁴¹⁾。

第3爆撃大隊の岩国移駐は慌ただしく行われた。第3爆撃大隊所属の第8爆撃飛行隊の場合、開戦の時点で福岡県の芦屋基地に一時駐留中^{イ・D・V}であった。当時の第8爆撃飛行隊のホームベースは埼玉県にあるジョンソン基地であったが、極東空軍のテスト飛行のために数日前から一時的に芦屋に来ていたのである。

同じく第3爆撃団所属の第13爆撃飛行隊の場合、開戦時は岩国で軍事演習を行っている最中であった。彼らは緒戦の空襲に動員され、B26で出撃した。第13爆撃飛行隊のビットマンは、8日の出撃で韓国の鉄道に500ポンド爆弾を落として岩国に戻ったが、ゆっくり休むまもなく次は岩国から北朝鮮へ飛び、平壤の滑走路と建物を爆撃した⁽⁴²⁾。このように第3爆撃大隊の飛行隊は緒戦から朝鮮半島へと出撃し、極東空軍は戦時態勢を整えるために諸部隊の再配置を進めていく。第49戦闘爆撃大隊は三沢から板付へ移動して第8戦闘爆撃に参加し、第35要撃戦闘機大隊も芦屋に送ることになった。そうした中で第3爆撃大隊の配置について極東空軍の政策立案者は英連邦軍やオーストラリア政府が朝鮮戦争参戦を声明する以前から、岩国基地に「強欲な目を向けた」⁽⁴³⁾。駐米オーストラリア大使は6月29日ワシントンで豪軍77飛行隊（ムスタング部隊）の戦闘参加を認める。それによって米空軍第3爆撃大隊の岩国配備への道は掃き清められ、7月1日にいたって正式な移駐が発令されるのである。すでに岩国から出撃をくりかえしていた第13飛行隊のビットマンは、その頃、元のホームベースである横田基地に戻って、そこで荷物をまとめて岩国に戻ってくるようにという指示であった⁽⁴⁴⁾。極東空軍最高司令官ストラトマイヤー将軍は1950年7月2日の日誌に「第8戦闘大隊と第3爆撃大隊の士気は優れて高い。激務の飛行と戦闘が行われたにもかかわらず、彼らは皆、出撃したいとウズウズしていた」⁽⁴⁵⁾と書かれている。

米軍の慌ただしい岩国移駐に際しては、それまで岩国基地を占有していた豪軍と突然に

移駐してきた米軍部隊との間に多少の混乱があったようだ。豪空軍第 77 飛行隊司令官のスペンスさえ、米軍の岩国移駐を事前に知らされていなかったという。米軍が岩国基地の宿舍や施設を突如として立入禁止にしたため豪軍兵士が立ち往生し、両軍の軍人どうしが衝突して殴り合いになったりスペンス司令官が「逮捕」されたりする一幕さえあったという⁽⁴⁶⁾。とはいえ、それは短時間のエピソードにすぎない。岩国空軍基地を共通の拠点として豪空軍と米空軍は互いに緊密に協力しあい、朝鮮戦争への介入を拡大させていった。前述のビットマンは開戦から 1 ヶ月余りで岩国から 50 回以上の出撃を行ったという。韓国内では大邱飛行場 (K-2) にテントシティがつくられ、岩国と朝鮮半島の爆撃地を往来する爆撃機のターンアラウンド基地になっていた。

1950 年 9 月 15 日の仁川上陸作戦以後、朝鮮戦争の戦局は大きく転換する。圧倒的な空軍力によって制空権を確保しつつも地上で韓国東南部の釜山近郊に追いつめられていた国連軍側は仁川上陸によって攻勢に転じ、首都ソウルを奪回するのみならず、38 度線を越えて北上し、北朝鮮と中国の国境である鴨緑江まで迫った。第 3 爆撃大隊の B29 は、9 月初旬に裡里^{イリ}の鉄道^{イグサン}を空襲した。裡里駅^{イグサン}は、7 月に行われた国連軍の空爆によって付近の民間人が被害を受け、死者が 350 人にもものぼったという事件で知られている。9 月の裡里攻撃は、仁川上陸作戦から北朝鮮の注意をそらす欺瞞作戦の一環であった⁽⁴⁷⁾。

第 2 節 岩国市横山に墜落した米軍爆撃機 B26 と搭乗員

1945 年 9 月 2 日の降伏文書調印以降、日本の各地で占領軍機の事故はしばしば発生している。だが朝鮮戦争勃発後、多数の占領軍機が「国連軍」機として朝鮮半島に出撃し、爆撃機・戦闘機・輸送機・偵察機などの離発着は激増し、そのために占領軍機の事故や墜落は急増していった。朝鮮戦争が続いた 3 年間に、田畑や山林、建物などの物質的損害のみならず、一般住民が巻き込まれて死傷する事件も相次いで起きている。朝鮮戦争勃発後の日本国内で最初の大きな軍機墜落事件は、1950 年 9 月 27 日、岩国市において発生した。

墜落したのは当時英連邦軍が接収した旧岩国藩主吉川家の邸宅からほど近い、岩国市横山旭町である。第 3 爆撃大隊第 8 爆撃飛行隊の爆撃機 B26 インベーターが、岩国基地を離陸してまもなくエンジンの故障で制御を失い、基地の西方 8 ロで墜落し、民家に突入した。爆弾が積まれていたため、大爆発が起き、火災が燃え広がって民家 2 軒半が消失し、住民 3 名が死亡、5 名が負傷という大惨事になった⁽⁴⁸⁾。

墜落機を操縦していたパイロットと他の 2 人の搭乗員はパラシュートで脱出したが、別の 1 人は脱出できずに墜落・死亡した。パイロットは、^{B i l l y}・^M・^{J o n e s}という名前である⁽⁴⁹⁾。有名な同姓同名の人物として、^{B i l l y}・^{M a d d o x}・^{J o n e s} (1925 年 1 月 3 日～2018 年 4 月 28 日) という人がいる。この人は子どもの頃から大の飛行機好きで、大戦中に飛行学校を了えて B-24 に乗り込むやいなや事故で首を骨折し 1 年も入院し、退院するとすぐに飛行士に復帰したという逸話の持ち主である。大戦後の予備役時代にジョージア大学ロースクールに通い司法試験合格を果たし、新設の米空軍に入隊し、日本占領にも参加している。この人が 1950 年 9 月に日本で B29 を操縦していたとしても不思議はない。ただし朝鮮戦争下にどこで何をしていたかが定かでなく、公開されているこの人の履歴には第 3 爆撃大隊に関する情報がないので、今はまだ同一人物であると断定するこ

とができない。朝鮮戦争下には OSI の軍事諜報組織に属していたと書かれている。朝鮮戦争後にはジョージア州の空軍基地の勤務やテストパイロットの任務を経て 1970 年代にはジョージア州軍の副将軍に就任、少将にまで昇進し、1980 年代にはレーガン大統領の下で国防副長官に任命されている。「占領軍記章（日本）」をふくめ数々のメダルや叙勲を受け、軍人として輝かしい栄誉を与えられた人物である⁽⁵⁰⁾。

死亡した搭乗員は、ラルフ・ネヴィル・カロック（1920 年 6 月 14 日～1950 年 9 月 27 日）である。彼はジョージ・カロックとティルザ・グレースの長男として、ペンシルバニア州インディアナ郡の自治区ソルツバーグで生まれた。三つ下に弟ドナルド、四つ下に妹グレース、六つ下に弟アルバートがいる。幼い頃に一家はペンシルバニア州アレゲニー郡のピッツバーグに移り、そこでマウンテン・レバノン高校を卒業し、ピッツバーグ大学に進んだ。学生会やスポーツに楽しそうに取り組んでいたらしい高校や大学の生活の一端は、米国学校年報のサイト上で数枚の写真を見ることができる。1941 年 7 月 1 日に登録された徴兵カードによれば、学生、白人、21 歳、体重約 67 キロ、目と髪は茶色、身長約 174 センチ、住所はアレゲニー郡キャッスルシャノンとなっている⁽⁵¹⁾。



（学生時代、20 歳の頃）

カロックはコロラド州にある米国陸軍空軍のローリー基地に入営し、第二次大戦で戦った。中国、ビルマ、インドにおいて第 10 空軍に奉仕したことを讃えるエアメダルとパープルハートを授与されている。ローリー基地にいる間に 4 つほど年下のジーンマリーと結婚したが、この結婚はうまくいかなかったようだ。1946 年 3 月のピッツバーグの地元紙は、戦地から帰還したカロック大尉が 8 回も調停を試みた末、とうとう離婚裁判所に訴えたという顛末を詳しい記事にしている。戦争英雄であるカロックのゴシップは人々の好奇心を集めたのか、同じ 1946 年 12 月の地元紙には、カロックが今度は「父親を救助」して逮捕されたという記事



（訃報記事、遺影）

がみえる。アレゲニー郡蒸気暖房社の労働争議中、従業員だった父ジョージが社内に入ろうとしてピケットで止められてもみあいになり、カロックがジョージに加勢して騒動になった、という話である。ピケット側が罰金、カロックは不起訴になっている⁽⁵²⁾。

カロックは大戦後は復学し、ピッツバーグ大学の法科大学院を卒業した。『ピッツバーグ大学法律レビュー』第 10 号(1948-1949 年)にはカロックが寄稿した論文が掲載されており、今日この論文を引用している図書もある⁽⁵³⁾。弁護士になりたいと念願し、軍の休

暇中にペンシルバニア州の司法試験に合格している。朝鮮戦争勃発後に軍務に戻ったが、カロックは9月11日に極東に到着してから本国に手紙を書き送り、不在でも登録が認められるかどうかを確かめている。アレゲニー郡の審査委員会がこれを受けて承認を決めたが、その2日後に、カロックの乗るB26は墜落したのである。搭乗する予定でなかったにもかかわらず、砲撃手が不足していたため自ら搭乗を買って出たと伝えられている⁽⁵⁴⁾。墜落時に脱出できなかったカロックは死亡し、本国ミズーリ州セントルイスで実家に身を寄せていた妻シャーリーと娘シャロンがあとに遺された⁽⁵⁵⁾。

カロックはポーツマス昇進によって大尉から少佐に昇任し、完全な軍葬をもってアーリントン国立墓地に埋葬された。彼は朝鮮戦争下の空軍戦死者としてはこの墓地に埋葬された最初の軍人であるという。アーリントンでの軍葬には空軍長官トーマス・K・フィンレター、空軍参謀長ホイト・S・ヴァンデンバーグ将軍とその夫人、空軍副参謀総長ネイサン・F・トゥイニング中将が参列している⁽⁵⁶⁾。



『オーストラリア女性ウィークリー』
に載った錦帯橋の写真

(上) 1946年4月20日号に掲載。「これが我が軍が占領した日本だ」というキャプションがついている。

(下) 1946年6月11日に掲載。橋を西方へわたると、右側(北)に英連邦占領軍が接收した吉川邸があり、左(南)に墜落現場がある。



第3節 B26 墜落で被災した岩国の人々

本節では、作本クニさんの孫にあたる寄本幸子さんと作本敏彦さんのお話やそのときに提供して頂いた資料をもとに、被災者の視点からB26墜落事件を振り返ってみよう⁽⁶¹⁾。

墜落現場は、錦帯橋から南へ300メートルほど南方の、横山1丁目の錦川沿いである。そこには作本家、木村家、井下家、益田家、齋藤家の家々が並んでいた。B26は井下家を

直撃して家屋を破壊し、エンジンから火を噴きながら隣の作本家の家に突っ込んだ。B26の胴体は作本家に墜落し、その翼は錦川の河川敷に飛散していった。ガソリンの誘爆で火はまたたく間に燃え広がり、作本家と井下家は全焼し、木村家の家は半焼した。木村カメノさん(60 歳)は、階段に火がまわったため二階の窓から飛び降り、命はとりとめたものの重傷を負った。井下満ちゃん(3 歳)と、作本クニさん(66 歳)とその孫の光忠ちゃん(5 歳)は崩壊した家屋に埋没して死亡した⁽⁶²⁾。満ちゃんの母親は近年、こう語っている。

私の母は押しつぶされた家から助け出すことは出来たが、子供は死んでしまった。隣の家は燃え上がりお母さんと子どもさんがなくなられた。近所の人たちも土の中に埋まった爆弾が爆発するかもしれないということで、何日も公民館に避難しなければならなかった。

講和条約前のことだから、すべて米軍の言いなりだった。私の子どもを含めて3人も殺した米軍がやったことといえば、立ち入り禁止にして、墜落した飛行機の残骸をいち早く回収して持ち帰ったことだけだった。あとは何もない。

私たちは何の抗議も出来ずに泣き寝入りだった。講和条約後に、市から見舞金があったように記憶しているが、その金で子供が帰ってくるわけもないし、家を建て替える費用の足しにもならなかった。

私たちは、終戦で中国から引き揚げてきた。その途中の船の中で子どもを死なせてしまった。本当に惨めな思いをしたが、朝鮮戦争でふたたび子どもを殺されてしまった。⁽⁶³⁾

B26 が墜落した作本家には、本家の当主である光四郎・クニ夫妻と、戦病死した長男の妻とその5人の子どもたちが同居し、分家である次男夫妻とその5人の子どもたちはその隣で暮らしていた。軒を連ねる齋藤家と益田家は、光四郎・クニ夫妻の長女と次女の家である。墜落が平日の昼時だったため勤務先や学校に居た家族は難を逃れた。が、高齢者と幼児は家に居て被災した。

その日の正午過ぎ、たまたま郵便局の勤務を休んで家に居た幸子さん(当時 18 歳、旧姓齋藤)がガラス戸の所に立ったその瞬間、真っ赤な炎が上がり、バリバリバリドッカーンという爆発音がした。庭に真っ赤な炎と黒煙、青白い光が見えた。その光が機関銃の弾が爆発していたものとわかったのは後日のことである。

作本家は神社仏閣の建築に従事した宮大工の家だった。旧岩国藩主吉川家の大工仕事や錦帯橋の補修などを差配し、1885 年の吉香神社の移築・建立にも作本家が棟梁をつとめている。光四郎さんの代には 120 人くらいの従業員がいた時期もあった。蔵には岩国が誇る文化遺産である神社仏閣や錦帯橋の設計図が保存されており、その一部は B26 墜落以前に徴古館に寄贈されている。冠婚葬祭の什器などもそろっており、折々に人がそれらを借りに来た。そのように作本家は裕福な一家であった。戦時下に息子たちが召集され、長男が戦病死するという不幸に見舞われたが、土地や畑があり、借家経営や店舗営業による収入もあった。吉香神社の池や庭園などの傍に職人が飲食できる店があり、クニさんがそれらの店や貸家の世話をしていた。クニさんは気丈で厳しい人で、「曲がったことをするな」と孫たちに言い聞かせていたという。クニさんは養蚕の副業もしていた。桑畑を持ち、

家の二階で蚕を飼っていた。幸子さんは子どもの頃、毛虫（けご）の世話をする手伝いをしたという。蚕から得られる糸を使って、部屋の隅にある機織り機で機織りもしていた。B26の墜落は、作本家が新たに工務店を設立しようとしている矢先のことだった。



（作本家の写真。大人4人は左から光四郎、クニ、次男の重治、長男の松人）

B29 墜落当時、敏彦さんは岩国小学校の6年生。小学校から家の付近で煙があがり家が燃えているのが見えて、家に駆けつけた。錦川に架かる錦帯橋は折しも台風で流失していたので錦川を泳いで渡り、土手を走り抜けた。炎上する家に飛び込もうとする敏彦さんを、誰かが、行っては危ない、と捕まえて止めた。弟の哲夫ちゃんが火だるまになって家から出てきたが、いっしょに遊んでいた従弟の光忠ちゃんは家屋の下敷きになって助からなかった。墜落した B26 は朝鮮へ行って落とす爆弾を4つ積んでいた。墜落直前にそれらの爆弾を岩国市内の平田、愛宕、牛野谷地区で投棄したらしいという話が後から伝わったが、墜落直後には爆弾その他の危険物がいつ爆発するかわからないとして米軍が現場を封鎖して立入禁止とし、被災者たちは着の身着のまま横山2丁目にある公会堂へ避難する。敏彦さんが川底や土手にあった竹が足に刺さっていると気づいたのは、その公会堂に行っただけのことだった。あまりに動転しており、人にどうしたのかと聞かれるまで自分の負傷にも気づかずにいたのである。

木村タケさんは重傷を負って入院し、その後、木村家は他所に転居して、横山には帰らなかった。作本家の本家6人と分家4人、齋藤家の5人、益田家の4人は公会堂での避難生活となった。当時の公会堂はガラスも全部割れ、畳も汚れており、トイレも外の暗い所にあった。少女にとっては用を足しに行くのも怖くて不自由だった、と幸子さんは回想す

る。後に消防団の倉庫に移り、そこでの避難生活が半年位も続く。その間、消防署の手押しポンプを使って共同炊事をした。畑があったので野菜を食べることはできたが、突然家を焼け出された避難生活の心細さは察するにあまりある。そんな時、困っている被災者のために錦帯橋の近くのパン屋がパンを寄付してくれたことを敏彦さんは今も覚えている。父の光四郎さんは感謝して、そのパン屋が家を建てる時無料で大工仕事をしたという。そのパン屋は現在は「錦帯橋煎餅」の店になっている。二代目は敏彦さんから最近初めて当時の話を聞いて、「昔そんなことがあったのか」と驚いたという。

米軍はしばらく家族も警察も消防さえも日本人は墜落現場に近づけなかった。やがて米軍が弾薬探知機で爆発物の反応がないと確認し、残存物も地中深く入っているので爆発の危険はないとして、被災者の帰宅を許可した。それでクニさんの次男重治さんと孫である敏彦さん、幸子さんたちは焼け跡で遺体を探しに行った。崩れた木材の上にクニさんの脚が出ているのを引っ張り出したが、遺体はバラバラになっていた。手をそえると頭皮がずるりとむけてしまい、顔面はまったく失われていた。堅牢なセメント施工の地面の上に、真っ黒い灰や油が4～5センチも堆積しており、それをかきまぜると1センチ5ミリくらいの白髪がついた頭皮が見つかった。爆発で遺体は形もなくなり、頭蓋骨も粉々になっている。幸子さんと敏彦さんは、にょろにょろしたようなものをつかみあげて、「これが脳みそだろうね」と言い合いながら、ミルク缶に半分くらい骨片などを拾った。土中には体液も血液も混じっている。その土と灰を集め、墓に埋めた。機関銃の弾丸も散乱しており、幸子さんたちはその弾を拾い集めて井戸の中に棄てた。光忠ちゃんは左腕が無い状態で見つかった。敏彦さんは、「遺体はぐしゃぐしゃだったが、気持ちが悪いとかそんなことは全然なく、怖いという感じも何もなかった」と語る。米軍人の骨も見つけた。場所や形状からクニさんや幼児たちの骨でないことは明白だった。骨になっている米軍人に憎しみは感じなかった。敏彦さんは叔父の松人さんを戦争で亡くし、父の重治さんが戦地に行ったときの寂しさを幼心に刻んでいた。異国で墜死した米軍人の骨を見て、「身内があんなことになっていたら」と思うと気の毒だった。「この外国人も戦争の犠牲者だ」と思って、米軍人の骨も墓に埋葬したという。敏彦さんは錦川の土手にあるベンチに腰かけて、清流の川面を見つめながら当時のことを話し、「戦争は憎いです」と語った。

墜落事故が起きなければ、作本家は計画通り、新しい工務店をオープンし、昔からの裕福な生活はその後も続いていただろう。だがB26の墜落で一家はいきなり家屋が全焼し、かけがえのない家族と財産を失った。敏彦さんは小学校の修学旅行にも行かなかった。避難生活の中で経済的にも精神的にも余裕はなく、行こうという気にさえなれなかったという。中学生になると親戚の瓦屋でアルバイトを始め、中学を卒業するとすぐに帝人に就職した。これほど甚大な損害をもたらしたにもかかわらず、米軍からの被害補償は皆無であった。連合国最高司令部は占領軍が引き起こした事故や事件に関する連合国側の補償責任を一切認めなかったのである。前述の井下満ちゃんの母親の言葉にもあったように、後に山口県から「お見舞い」が届いたものの、それだけであった。敏彦さんと幸子さんによれば、「戦時中の爆撃と同じことで、補償など何もなかった」。生活再建のため被災者たちは自力で何とかするしかなく、祖先から受け継いだ土地も手放さざるを得なかった。

第4節 相次いだ朝鮮戦争下の事故・事件

1950年9月27日のB26墜落事故は、朝鮮戦争下に日本で発生した数々の軍機事故の中で最初の大きな事件のひとつであった。その後も日本から離発着する軍機の事故は、岩国基地周辺においても他の地域においても相次いで発生する。

まず、岩国市役所が発行している冊子『基地と岩国』を見てみよう。ここには1948年から2018年に岩国基地周辺で起きた航空機事故105件の一覧表が収録されており、岩国における軍機事故発生状況を知る上で良い手がかりになる。その一覧表には、1950年9月27日のB26墜落事件をふくめ、朝鮮戦争下の軍機事故が全部で5件載っている。1951年中に起きた3件は、1件目が2月8日に室の木に米軍機が焼夷弾を落下して山林が消失した事件、2件目が6月14日に錦見伊勢丘で豪空軍小型ジェット戦闘機が墜落し、山林が消失した事件、3件目が8月1日に柱島に占領軍爆撃機が500ポンド爆弾6個を落とし、内一発が炸裂して畑作物被害があった事件である。これら1951年中の3件の後は、朝鮮戦争が終わって3年ほど後に発生した、錦川に米軍機が不時着して通信線を切断した1956年4月24日の事故が載っている⁽⁶⁴⁾。

が、この内1951年6月14日の事故に関しては、「乗員死亡」というのは事実誤認である。当時、朝鮮戦争の空戦でソ連製のミグ戦闘機が驚異的な力を発揮していたのに対し、豪空軍は従来のムスタングから新たにジェット戦闘機ミーティアへと転換を図っていた。その転換訓練で試験飛行中の第77飛行隊のパイロットであるトム・ストーニーが自動射出装置で機外へ射出され、無人のミーティアが山の中に墜落した。つまり乗員は死亡してはいない⁽⁶⁵⁾。この出来事を目撃した第77飛行隊のパイロットはこう回想している。

飛行経路に立っていると、重い物がぶつかるような音が聞こえた。見上げると上空にパラシュートが開いている。飛行機はミーティアで、パイロットなしに目的もなく旋回し、近くの丘に墜落した。パラシュートをつけたトム・ストーニー軍曹が近くに着陸した。彼の射出座席は自動的に発射した。調査の結果、座席発射のメカニズムを固定するラグのおかげでトムは恐怖を感じず、初期の放出体験をしなかったとわかった。ミーティアがトムを投げ出して、その後、トムの周りを5回も旋回し、そのうち1回は20フィート以内に近づいた。が、その事実は彼の印象に残らなかったのだ！⁽⁶⁶⁾

パイロットを座席ごと機外へ射出する機能はパイロットを守るのに役立つ一方、無人の機体は落ちる場所を選ばない。岩国で起きたミーティア射出事故では幸運にも人身被害がなかったが、同年11月11日に韓国では金浦空港の近くで第77飛行隊のミーティア2機が空中で衝突し、一人の乗員は機外に射出されて無事だったものの、もう一人の乗員と一人の民間人少年が死亡している⁽⁶⁷⁾。

「乗員死亡」という誤記がある一方、『基地と岩国』には、搭乗員が死亡していても岩国市民への直接的被害がなかった朝鮮戦争下の事故は載っていない。が、実際には基地近傍ではより多くの深刻な軍機事故が連続的に発生していた。次の表は、国際的な航空機事故データベース⁽⁶⁸⁾を参考にして朝鮮戦争中の1951年～53年に岩国周辺で発生した主な

事故をまとめたものである。少なくとも 54 名の軍人が岩国付近で軍事訓練やテスト飛行、出撃のための離発着や哨戒飛行などの軍事行動の最中に命を落としていることがわかる。たまたま無人の山や海に落ちたため日本人に被害がなかったとしても、いずれも一步間違えば地域住民の命と生活を破壊しかねなかった事故である。

表 朝鮮戦争下に岩国基地を離発着し、搭乗員が死亡した軍機事故（1951 年以降）

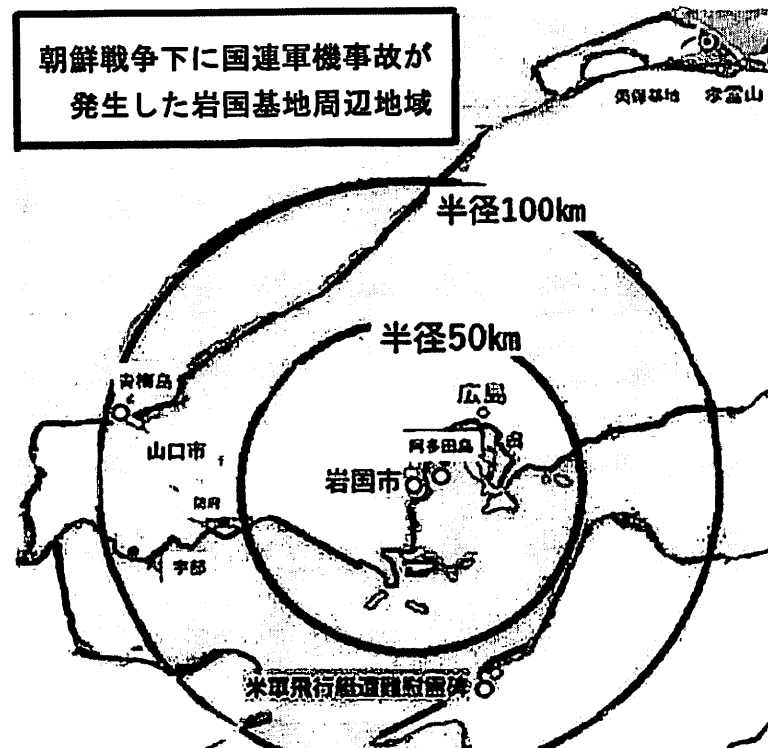
1951/ 2/25	米空軍	大邱から岩国基地へ帰ってきた輸送機 C-46 が岩国基地滑走路から 6.5 キロ手前の山の斜面に衝突。3 人の乗員全員が死亡
1951/ 3/3	米空軍	朝鮮戦争前線から岩国に接近中の A26 が燃料不足で沖合数キロの海に墜落。乗員 3 人死亡
1951/ 3/30	米空軍	朝鮮から岩国へ帰還した A26 が滑走路の境界線の 3 km 手前で墜落、乗員 2 人死亡
1951/ 4/17	豪空軍	第 77 飛行隊の R.ロブソンがムスタングでクロスカントリーの夜間高高度演習中に墜落して死亡。
1951/ 4/22	米海軍	PBM マリナー が岩国基地で出撃訓練中、安芸灘でエンジンが故障、瀬戸内海に墜落。6 人の乗員全員死亡
1951/ 7/27	米海軍	岩国基地から哨戒爆撃機 PB4Y-2 プライヴァティアが夜間離陸して上昇中、基地北東約 6 キロの阿多田島に墜落。9 人の乗員全員死亡。
1951/ 11/25	米海軍	PBM マリナーが海上哨戒飛行の後、強い横風で岩国基地に着陸できず、沖合で墜落。乗員は 4 名死亡、10 名は救助。
1952/ 8/8	米海軍	VP892 の PBM マリナーが夜間対潜哨戒中、岩国に向かう途中で濃霧のため迷い、大洲市の出石山に激突、墜落。乗員 14 名全員死亡。
1952/ 9/1	豪空軍	第 77 飛行隊のミーティアが激しい雷雨の中、長門市県門市青海島の近くで墜落。A.J.エイブリーと H.E.ジョンストンが死亡
1953/ 3/25	英空軍	サンダーランドが岩国基地の近くに到着したが、荒天のため着陸に失敗、4 人が死亡。

これまでに豪空軍第 77 飛行隊や米空軍第 8 爆撃飛行隊をとりあげたが、この表にも表れているように、英空軍や米海軍の輸送機や哨戒機もまた朝鮮戦争下に岩国基地に乗り入れており、それらの軍機事故も発生している。英空軍のサンダーランドは朝鮮戦争開戦後、朝鮮沿岸の巡回のため岩国に移された。朝鮮戦争中に英空軍第 88、第 205、第 209 飛行隊が岩国を拠点としてサンダーランドで毎日のように哨戒作戦を展開していた⁽⁶⁹⁾。

米海軍の偵察飛行隊（VP）による事故も少なくない。なお、表の中の 1952 年 8 月の事件は愛媛県大洲市に米海軍機が墜落した事件だが、墜落現場の近くに事故犠牲者を弔う「米軍飛行艇遭難慰霊碑」が建っている。搭乗員たちの遺体と飛行機の残骸の処理と慰霊に尽力した付近の豊茂郷集落の人々が、2009 年に建立したものだという⁽⁷⁰⁾。

そのほか、多数の住民被災者を出した 1951 年 10 月 14 日の米海軍燃料タンク投下事件について言及しておこう。「事故」ではなく故意に投下したもので、表には記入していないが、見過ごせない重大事件である。顛末はこうである。朝鮮戦争に行く厚木基地所属の米海軍機が板付基地から岩国基地へ向かう途中の同日午前 6 時頃、宇部上空でエンジント

ラブルが起き、機体を軽くしようとして燃料タンクと爆雷 2 個、無線機を投棄した。それが民家に落ちて火災が広がり、家族のべ 7 名が死亡、多数が重傷を負う大惨事となった。当時山口県渉外課連絡調整係、秘書課外事連絡係(岩国キャンプメンテナンス所長)であった松尾登氏が山口県史の編纂に協力して当時を回顧し、補償交渉にずいぶん苦労し、厚木の兵隊たちからいくらか義援金が集まったものの、公式の補償はついに行われなかったと証言している⁽⁷¹⁾。



米海軍の関係では、軍艦からの漁民発砲事件があったことにもふれておきたい。第 1 章で朝鮮戦争開戦 2 月前に広島湾で発生した米海軍機と豪空軍機の衝突事件に言及したが、開戦後の広島湾は一举に戦時色となった。戦闘・偵察・攻撃のための艦載機を配備した空母、駆逐艦、輸送艦など、英米豪の様々な軍艦が湾内を往来し、1950 年 10 月 27 日には「豪軍海軍呉駐在士官」から「広島海上保安庁」宛てに、「あらゆる船舶及び遊泳者は岩国港に停泊中の軍艦の付近 500 ヤード以内に近接すべからず」との命令が発出される。それでは岩国港は全く封鎖された形になってしまうため、海上保安庁や関係者は緩和を求めて申し入れを行ったようだ。が、命令の撤回がないまま 12 月 21 日、民間船である共栄丸(14 トン)が岩国市山陽パルプ工場に納入する木材の搬送で岩国港沖を航行中、付近に投錨中の軍艦の 20 メートル付近にさしかかった。そのとき軍艦より小銃射撃が行われ、共栄丸に乗っていた男性が撃たれ、下腿部を骨折する重傷を受けた。占領軍側からはこの事件に対して一片の謝罪もなく、それどころか事件 5 日後の 26 日、豪軍憲兵隊長から岩国警察隊長を通じて、「岩国市在岩国航空隊沖に停泊中の連合軍間周辺百メートル以内の日本船航行を禁止する。これに違反する場合は発砲せられるであろう」という警告が発せられている⁽⁷²⁾。

このような形で地域が戦時体制に組み込まれる状況は、岩国だけではなかった。朝鮮戦

争勃発後、北海道から九州まで各地の飛行場の拡張・増強工事⁽⁷³⁾が行われ、それらが国連軍の朝鮮戦争基地となったため、軍機事故は各地で増えた。とりわけ多数の地域住民を死傷させ甚大な被害を与えたものだけを列举してみよう。

1951年5月10日には福岡市東区二又瀬の市街地にある醤油醸造業者方に板付基地のジェット戦闘機が墜落し、乗員1名と市民11人が死亡する事件が起きる⁽⁷⁴⁾。

朝鮮戦争下に極東空軍爆撃軍団司令部が置かれた横田基地は、B-29爆撃機の出撃拠点であり、1951年11月18日にB-29爆撃機が横田基地離陸直後に東京都北多摩郡砂川村に墜落し、積載していた爆弾が爆発した。そのため爆発・爆風・火災で3戸が全焼、30件前後の家々が全半壊し、軍機搭乗員2名と地上にいた横田基地の消防隊員10名、地域住民5名が死亡、住民20数名が負傷するという被害が出た⁽⁷⁵⁾。

その2カ月余り後の1952年2月7日、横田基地を飛び立った別のB-29が吹雪の夜に埼玉県入間郡金子村（現、入間市西三ツ木町）に墜落する。搭乗員13名全員と住民4名が死亡、多数の民家や施設が損傷を受けた⁽⁷⁶⁾。

1952年4月28日にサンフランシスコ講和条約が発効（調印は1951年9月8日）し、連合国対日「占領」は終わった。だが講和条約と同日に調印され同日に発効した日本政府と、朝鮮戦争派遣国連軍への協力を約束した吉田・アチソン交換公文に基づいて、以降も日本の国連軍協力が続いた。朝鮮戦争時代最多の死者を出した軍機事故が発生したのは、翌1953年6月18日のことである。東京都小平町のスイカ畑に米軍の大型兵員輸送機C-124が立川基地を離陸直後に墜落し、搭乗員7名・乗客122名、合計129名にもものぼる朝鮮に向かう米軍人が死亡したのである⁽⁷⁷⁾。

このように、朝鮮戦争時代の日本は国連軍が朝鮮戦争を遂行する基地として使われたことに起因して、朝鮮半島と日本を短時間で自由に頻繁に往来する軍機の事故や事件が連続的に発生し、多数の地域住民に大きな惨害をもたらしたのである。

（終わりに）

本稿は、岩国が連合国占領下に占領軍空軍基地・演習場となり、朝鮮戦争下に豪空軍・米空軍機が出撃した事実を追跡し、岩国が戦場と直結する中で市民の日常が朝鮮戦争と結びつけられていった過程を明らかにした。1950年9月27日に発生したB26墜落事件は、朝鮮戦争時代に日本各地に相次いだ地域住民を巻き込む軍機事故の中で最初の大きな事件となった。旧日本軍が遺した軍事遺産があり朝鮮半島に近い岩国は、占領に当たった豪空軍が早くから滑走路や軍事施設を拡充させていたこともあって、朝鮮戦争下には国連軍に好都合の軍事基地として利用され、その結果、朝鮮半島に対する国連軍の無差別爆撃に加担するとともに、住民が命と暮らしを脅かされる状況へ追い込まれた。

朝鮮戦争は岩国に基地が永続化される画期となった。1952年には正式に米空軍基地となり、その後、米海軍、さらに米海兵隊へと移管されつつ、基地機能は増強の一途を辿り、ベトナム戦争と湾岸戦争においても岩国は戦場に直結され、戦争の拠点とされた。今日の岩国基地は、2000年代に完了した沖合移設拡張工事と2010年代の厚木からの艦載機受入と大規模な米軍住宅地区の建設によって東アジア最大級の米軍基地となっている。だがそのような岩国基地の背後には、基地と戦争によって望んでいた人生を奪われ、命を落としたり身心に傷を負ったりした無数の人々の悲しみと憤怒、失意と絶望が隠されていること

を忘れることはできない。本稿で明らかにしたように、朝鮮戦争下には 38 度線の南でも北でも空爆によって莫大な民間人が殺され、日本の各地においても基地周辺住民の被害が相次いだ。また多くの国連軍のパイロットたちも岩国やその周辺で命を落とした。そのようにして失われた人々の命に替えることができるものは何かあるだろうか。生き延びた人々の心にも戦争の傷は深く残された。

空から頭上に爆弾や軍機が落ちてくる恐怖を体験したり、愛する家族や友人を失った人々は癒やしがたいダメージを負った。また、空爆の実行者たちの間にも戦場のトラウマは残るという。本稿では豪空軍パイロットの戦死やその妻たちの不安についても言及したが、生還したパイロットたちも無傷であったわけではない。コティらと編隊を組んで平澤爆撃をはじめ多数の出撃任務を遂行したレオ・マクロードは後年、開戦当時の情熱を自嘲的に語ったという。第 2 次大戦終結後に日本に来て「遅すぎた」と感じていた者たちが「小学生みたい」にはしゃいで朝鮮戦争に参加したが、本当の戦争で目にする恐怖がどれだけのものかを何も知ってはいなかった、と。ケンも戦争で人が変わってしまった、と妻のメアリーは語る。彼はみんなと過ごすのが好きな、ユーモアのある、心の優しい楽しい人だった。が、戦場から帰った彼は悲しげで、気難しく、人との交わりたがらない人になっていた。結核で身体も病んでいた。自分が結婚したはずの人とは別人の、知らない人のようだった。メアリーは戦争で殺人を強制され、「爆弾を扱ったり、砲撃で血が川のように流れる」戦場を見たことが夫に回復不能なダメージを与えたと確信したという⁽⁷⁸⁾。

米国が国連安保理に北朝鮮非難決議を挙げさせ、「国連軍」を率いて朝鮮半島の内線に介入を始めてからすでに 70 年以上が経つ。足かけ 4 年、3 年間余り続いた朝鮮戦争下の死者の遺族たちにとって昨年从去年、来年、再来年は折しも 70 年忌に当たる。この戦争における「国連軍」の軍事行動が誰をどのように幸福にできたのだろうか。見失われがちな朝鮮戦争の死者たちと遺族たちの体験に即して、この問いを發し続けたい。

註

(1) Alan Stephens, *Going solo : the Royal Australian Air Force, 1946-1971*, Australian Government Publishing Service, 1995, p.212

<http://airpower.airforce.gov.au/APDC/media/PDF-Files/Historical%20Publications/HIST03-Going-Solo-The-Royal-Australian-Air-Force-1946-1971.pdf>

(2) Ibid., p.211

(3) ムスタングの搭乗員 3 名とモスキートの搭乗員 2 名が死亡した。ALLAN John Gibson 407213 : <https://aviationmuseumwa.org.au/afcraaf-roll/allan-john-gibson-407213/>

(4) Stephens, Ibid., pp212-214. 第 76 飛行隊はまもなく防府基地へ移駐した。

(5) 全調達編『占領軍被害実態調査』。復刻版、六花出版、2021 年 6 月刊行予定。

(6) 同前

(7) 'Construction Squadron's fine work in Japan', 'Tackled everything from airstrips to beds', in *Australian Women's Weekly*, May 25, 1948, p.18.

(8) Stephen, Ibid., p.214.

(9) 『占領軍調達史 調達の基調』212-216 頁

(10) 註 (5) に同じ

(11) バウチャー前掲書(14-15 ページ)によれば、労働者の多くが十分働かなかったため県知事と警察署長を呼び出したところ、警察署長が日本の労働者たちがきつい労働をこなしているのにほとんどの者が飢えているという実情を遠慮がちに話し、「ご自分の部下たちに与えている 1 日分の食糧の半分でも彼らにお与え下さったら、きっと一日中懸命に働いて、ご迷惑をおかけすることはなくなると思います」と述べた。そこで占領軍の側が待遇を改善したところ、労働者たちがよく働くようになったという。

(12) Stephen, Ibid., pp.220-221

(13) スミス前掲書 70-77 頁、バウチャー前掲書 27-29 頁。

(14) Alice Jackson, 'AUSTRALIAN FAMILIES ARE ENJOYING LIFE IN JAPAN' , *Australia Women's Weekly*, P.20-21

(15) 演習場・射爆場の被害状況の中で最も大規模で深刻であったのは、SCAPIN1778 号で指令された竹島<独島>に対する空爆演習であった。なお、一覧表の表記は外務省の日本語訳を用いているが、GHQ の元の英文は LIANCOURT ROCKS である。

(16) 「漁民、不満の声－姫小島周辺の射爆続く」『読売新聞』1953 年 9 月 10 日。

(17) 'Milton Cottee', UNSW Canberra at the Australian Defence Force Academy:

<http://australiansatwarfilmarchive.unsw.edu.au/archive/863-milton-cottee>

(18) Stephen, Ibid., p.216.原文は次のとおり。That training cycle may not have meant anything to the citizens of Japan but it meant a great deal to the RAAF.

(19) Stephen, Ibid., p.217.

(20) ヒルは、は 1922 年 2 月 11 日に南オーストラリア州アデレードで生まれた。父アルバート・チャールズ・ヒルは第一次世界大戦期には従軍牧師をつとめた聖職者である。1941 年 4 月 24 日に 19 歳で豪空軍に入隊した。オーストラリア戦争記念館のホームページ。

<https://www.awm.gov.au/collection/C1224762>、駐日オーストラリア大使館：

https://japan.embassy.gov.au/tkyo/hodogaya_rh.html

(21) 1937 年以後の英国海軍航空隊基地のウェブサイト「R.A.A.F Station IWAKUNI: Lodger facilities for RN Aircraft Holding Unit (豪空軍基地岩国: 英空軍航空機保持部隊の駐留施設): <http://www.royalnavyresearcharchive.org.uk/FAA-Bases/Iwakuni.htm#.YDNI6nlUuUk>

(22) 'Wal Rivers', in Col King, ed., *Through Korean Skies 7.5GibEarly Days Of "5 Course" Pilots77 Squadron RAAF In Korea 1950 – 1953*, PDF, https://raafansw.org.au/docPDF/Through_Korean_Skies.pdf

(23) Cameron Forbes. *The Korean War*, Macmillan Publishers Aus., 2010, p.102.

(24) Stephens, Ibid., p.224-226 及び Milton Cottee, *Australians at War* Film Archive:

<http://australiansatwarfilmarchive.unsw.edu.au/archive/863-milton-cottee>.

(25) 平壤爆撃については、「京釜線 110 年、平澤駅 110 年、平澤の変化」(朝鮮語、「平澤市史(時事) 新聞」ホームページ <http://www.ptsisa.com/news/articleView.html?idxno=11957>:2021 年 1 月 28 日閲覧) 及び「6.25 記憶を刻む 京畿道の激戦地」(朝鮮語、京畿道ホームページ: <https://www.gg.go.kr/archives/3574453>:2021 年 1 月 28 日閲覧)

(26) 朴定仁將軍回顧録は「風雲の星」というシリーズ名でウェブサイトで公開・連載されている。 <https://m.blog.daum.net/koreanmarinecorps/17328>:2021 年 1 月 28 日閲覧

(27) Milton Cottee, Ibid.

(28) 'Persistency On Korea Failed', in *Newcastle Morning Herald and Miners' Advocate* (NSW : 1876 - 1954), 16 Augst 1950, p.3.

(29) RAAF Historical Section Units of the Royal Australian Air Force, ed., *A Concise History. Volume 2: Fighter Units. Canberra*, Australian Government Publishing Service, 1995, p.56.

(30) 金東椿『朝鮮戦争の社会史－避難・占領・虐殺』平凡社、2008 年、262 頁、456-457 頁、本誌に収録した康誠賢と金泰佑の論文、韓国真実和解委員会ホームページなどを参照。

(31) Milton Cottee, Ibid.

(32) 同前

(33) 同前

(34) John G. Westover, *Combat Support in Korea*, Center of Military History, U.S. Army, 1955, pp.81-82.

(35) Foug Hurst, *The Forgotten Few: 77 RAF Squadron in Korea*, Allen & Unwin, 60-61

(36) 77 Squadron Association RAAF , *Swift to Destroy: An Illustrated History of 77 Squadron RAAF 1942 - 2012*, Published by No 77 Squadron RAAF Association Inc., pp.23-24.

(37) Massey Stanley, 'Wives of Mustang pilots count returning planes', *Australia Women's Weekly*, 29 July 1950, p.17.

(38) Hurst, Ibid., p.39. ストラウトの埋葬については AWM のウェブサイト写真が公開されている。 <https://www.awm.gov.au/collection/P03193.008>

(39) William T. Y'Blood, *The Three Wars of Lt. Gen. George E. Stratemyer, His Korean War Diary*, 1999, p.49, 251, 436.

(40) 「第 3 爆撃大隊」は、The 3rd Bomb Wing 及び The 3rd Bomb Group の訳語である。厳密には Wing は「航空団」、Group は「飛行群」であるが、日本ではおおむね「大隊」と訳されてきたことを考慮し、本稿では「大隊」と訳し、その下位にある squadron を飛行隊と訳してい

る。米国の空軍勢力は第二次世界停戦後の1948年、それまでの米国陸軍航空軍（U.S. Army Air Forces; USAAF）から新設の米国空軍（United States Air Force, 略称：USAF）へと移行する。大戦中の陸軍航空軍は各3～4の飛行隊（squadron）を持つGroupを基本的な戦闘部隊としたが、新設の空軍がWingをベースにした組織に編成したため、従来のGroupが同じ番号・名称の上位組織であるWingに属することになった。第3爆撃大隊もこれに伴い、第3爆撃グループ系統は第3爆撃ウィングの下にあるという形となった。Judith Endicott, 'USAF Organizations in Korea 1950-1953', PDF:

<https://www.afhra.af.mil/Portals/16/documents/Timelines/Korea/USAFOrganizationsinKorea.pdf?ver=2016-08-30-151054-960>: 2021年2月6日閲覧

(41) Robert Frank Futrell, *The United States Air Force in Korea. 1950-1953*, United States Govt Printing Office, 1997, p.27, A. Timothy Warnock, ed., *The U.S. Air Force's First War: Korea 1950-1953 Significant Events*, Air Force History and Museums Program, Air Force Historical Research Agency, 2000. <https://www.afhra.af.mil/Portals/16/documents/Timelines/Korea/KoreanWarChronology.pdf?ver=2016-08-30-151058-710>: 2021年2月23日閲覧。なお6月28日に死亡

した6人のうち、2人は第8爆撃隊に所属し、A26機で文山で鉄道を爆撃後、日本に帰還の途中にエンジンが故障し、黄海の珍島付近に墜落して死亡、同じく第13爆撃飛行隊の2人もソウル北方の爆撃を終えて日本に戻り、芦屋空軍基地に着陸する直前にA26が制御不能になり、海に墜落して死亡した。またムスタングに乗る第339迎撃戦闘飛行隊（全天候型）の2人は板付基地への着陸に失敗して死亡した。Richard K. Kolb, 'What A Place To Die', *VFW*, June-July 2010, p.28. http://digitaledition.qwinc.com/publication/?i=37952&article_id=391208&view=articleBrowser&ver=html5: 2021年2月23日閲覧

(42) Robert Dorr and Warren Thompson, *The Korean Air War*, Motorbooks Intl, p13
(43) Futrell, *Ibid.*, pp.67-68

(44) *The Korean Air War*, *Ibid.*,
(45) William T.Y'Blood, ed., *The Three Wars of Lt. gen. George E. Stratmeyer: His Korean War Diary*, Air Force History and Museum Program, U.S. Government, 1999, p.50.

(46) Doug Hurst, *The Forgotten Few: 77 RAAF Squadron in Korea*, Allen & Unwin, 2008, p.30.
(47) Y'Blood, *Ibid.*, pp.195-196. なお、7月11日のB-29による益山駅一帯の爆撃は益山駅を平澤駅と誤認して爆撃したものだといわれている。

(48) 「米機民家に墜落」『朝日新聞』地方版、1950年9月28日
(49) 'USAF/USAAF AIRCRAFT ACCIDENTS 1943-1955 FOR JAPAN,' Accident-Report.com.
Military Aviation Incident Reports: <http://www.accident-report.com/world/asia/japan1.html>: 2021年2月14日閲覧

(50) 'Major General Billy M. Jones', Smithsonian National Air and Space Museum: <https://airandspace.si.edu/support/wall-of-honor/major-general-billy-m-jones>: 2021年2月14日閲覧, 'Obituary for Mr. Billy M. Jones', Banks Funeral Home:
<https://www.banksfh.com/obituaries/Billy-Jones-35572/#!/Obituary>: 2021年2月14日閲覧 'Jones, Billy M', Hall of Fame:
https://www.gaaviationhalloffame.com/hall-of-fame/?no_cache=1&tx_providersearch_providersearchfe%5Bprovider%5D=3444&tx_providersearch_providersearchfe%5Baction%5D=show&tx_providersearch_p

rovidersearchfe%5Bcontroller%5D=Provider&cHash=8b084b78e28561e98216bfc10a2343cf, 'Obituary for Mr. Billy M. Jones', The Atlanta Constitution, 6 Sep 2013.

(51) カロックに関しては Korean War Project のウェブサイトの'MAJ Ralph Neville Kallock' (<https://www.koreanwar.org/html/15380/korean-war-project-pennsylvania-ao443429-maj-ralph-neville-kallock>) および有料サイト ancestry.com や News Pper.com を通して'U.S., School Yearbooks, 1900-1999'や'US. World War II Draft cards Young Men'、地元新聞記事などを参照。

(52) 'Mt. Lebanon Officer Attempts Reconciliation Eight Times Before Seeking Divorce', *The Pittsburgh Press*, 2 March 2 1946, 'Army Captain Freed by Court', *The Pittsburg Press*, 11 October 1946.

(53) カロックが寄稿した論文は、Ralph N. Kallock, 'So You're Buying a New Automobile', *University of Pittsburg Law Review*, No.10. Rachel Rains Winslow, *The Best Possible Immigrants International Adoption and the American Family*, University of Pennsylvania Press, 2017, p.235.

(54) 'County Bar Adnuts Veteran Posthumously', *Pittsburgh Post-Gazette*, 18 Nov 1950.

(56) *Pittsburgh Sun-Telegraph*, 29 Sep 1950.

(60) '1ST AIR FORCE WAR DEAD BURIED IN ARLINGTON', *The Morning News*, Nov 3 1950.

(61) 本稿で論じる岩国市横山に墜落した軍機の機種は、米国のダグラス社が開発し、米陸軍航空軍や米空軍が運用した「ダグラス A26/B26 インベダー」であり、機体固有の登録番号は 45-35771 である。この機種は当初 A26 と呼ばれたが、米空軍は、別の有名な爆撃機「マーティン B-26 マローダー」が引退し、空軍が「A」（攻撃カテゴリ）の指定を削除したのを背景に、ダグラス・インベダーを B26 と指定するようになった。航空機事故について参照したウェブサイトでは岩国に墜落した飛行機について、Accident-Report Co m及び Aviation Safety Network では B26 と表記し、Bureau of Aircraft Accident Archives では A26 と表記しているが、同じものを指している。本稿では B26 のほうが爆撃機（Bomber）であることが伝わりやすいと考え、B26 の表記に統一した。本節は、特に別註がない限り、寄本幸子さんと作本敏彦さんからの聴き取りに依る。寄本さんと作本さんは、元岩国市議の田村順玄氏、故斎藤光正氏の夫人、元徴古館館長宮田伊津美氏、坂倉隆太郎氏から御紹介をいただいた。6 人の方々からはお話を伺うとともに資料の提供もいただいた。記して感謝します。

(62) 註(48)に同じ。

(63) 岩国基地の拡張反対連絡会議（代表 落合孝一）発行『岩国基地通信』257 号(2018 年 6 月 25 日)

(64) 「表 3-5 岩国基地周辺（山口県、広島県、愛媛県）における航空機事故等の発生状況（令和元年 12 月 31 日現在）」『基地と岩国 令和元年版』81-82 頁。

<https://www.city.iwakuni.lg.jp/uploaded/attachment/30075.pdf>

(65) 'ADF-SERIALS Australian & New Zealand Military Aircraft Serials & History': <http://www.adf-serials.com.au/2a77.htm>: 2021 年 2 月 14 日閲覧。なお、9 月の仁川上陸後、朝鮮戦争の形勢は逆転し、国連軍による空爆は韓国内の飛行場を前進基地として使用して 38 度線以北へ出撃する作戦が拡大していった。攻撃のターゲットが日本から遠ざかるのに伴い、第五空軍は戦術戦闘機を日本から韓国に移動させ、第 77 飛行隊も 10 月には浦項^{ボハン}へ、その 1 か月後にはさらに北上して北東海岸の連浦^{ヨンポ}飛行場へと移動し、豪空軍ムスタング部隊はこれらの前進基

地から出撃するようになった。その間も岩国は後方基地として維持され、 Mustang からミーティアへの転換訓練が必要になると再び第 77 飛行隊は岩国を拠点として訓練と出撃を行った。

(66) 第 77 飛行隊のミーティアへの転換訓練に関するロン・ガスリーの回想、Col King, *Through Korean Skies 7.5Gib: Early Days Of "5 Course" Pilots 77 Squadron RAAF In Korea 1950 - 1953*, pp77-78. https://raafansw.org.au/docPDF/Through_Korean_Skies.pdf

(67) 'ADF-SERIALS - Australian & New Zealand Military Aircraft Serials & History: RAAF A77 Gloster Meteor F.3, F.8, T.7, NF.11 and U.21A': <http://www.adf-serials.com.au/2a77.htm>.

(68) Aviation Safety Network (<https://aviation-safety.net/database/>) 及び Bureau of Aircraft Accidents Archive (<https://www.baaa-acro.com/crash-archives>) のデータベースなどを参照。これらのデータベースは世界中の航空事故を対象にしており、朝鮮戦争下に朝鮮半島で起きた、直接戦闘によらない軍機事故のデータも多数収録されている。たとえば 1952 年 2 月 22 日には釜山の近くの村において米空軍 F84 サンダージェットが発電所、病院、民家 4 軒を破壊して墜落し、米軍人の死者は出なかった一方、韓国人 14 人が死亡、20 人が負傷する事故が起きている (ASN Wikibase Occurrence # 85437, *The Straits Times* 24 February 1952, p1 参照)。

(69) 'R.A.A.F. Station Iwakuni: Lodger facility for RN Aircraft Holding Unit', 2021 年 2 月 20 日閲覧 <http://www.royalnavyresearcharchive.org.uk/FAA-Bases/Iwakuni.htm#.YF6j9UuUk>.

(70) 「米軍人の娘が献花 朝鮮戦争中 14 人が犠牲 大洲／愛媛：『毎日新聞』地方版、2016 年 4 月 13 日

(71) 柳本見一『激動の二十年 山口県の戦後史』毎日新聞西部本社、1965 年、147-148 頁、庄司潤一郎「朝鮮戦争と日本の対応（続）」(『防衛研究所紀要』10(2), 2007 年 12 月、63 頁、『山口県史』資料編現代 2、88 頁。

(72) 中国連絡事務局『執務半月報』1951 年 2 月 1 日、3-4 頁

(73) 朝鮮戦争勃発後、既設飛行場施設の拡張工事では千歳、八雲飛行場の建設工事、対潜水艦電探基地設定工事、厚木、木更津、横田、ジョンソン飛行場の新設および拡張工事、大原、美保飛行場の拡張工事、板付基地滑走路および給油設備工事、芦屋基地のエプロン拡張工事、築地飛行場の新設補修工事などが着工した。板付基地では PD 工事（日本の国家予算を支出する工事）の費用が朝鮮戦争開戦直前 3 ヶ月間の平均が月に 260 万円であったが、開戦後の 1 ヶ月で 1630 万円にはねあがっている。『占領軍調達史 調達の基調』1956 年、調達庁、376-377 頁。

(74) 柳本見一『激動二十年 福岡県の戦後史』毎日新聞西部本社、1965 年、pp183-184。

(75) 『毎日新聞』1951 年 11 月 19 日、『読売新聞』1951 年 11 月 20 日

(76) 『読売新聞』1952 年 2 月 8 日

(77) 『毎日新聞』1953 年 6 月 19 日、1953 年 6 月 2 日

(78) Joy Damous, *Living with the Aftermath: Trauma, Nostalgia and Grief in Post-War Australia*, Cambridge University Press, 2001, p.142.